

昭和41年4月12日・第1巻第3号 発行

昭和56年6月30日・第14巻 発行

—— (財)日本学校体育研究連合会機関誌 ——

学校体育研究

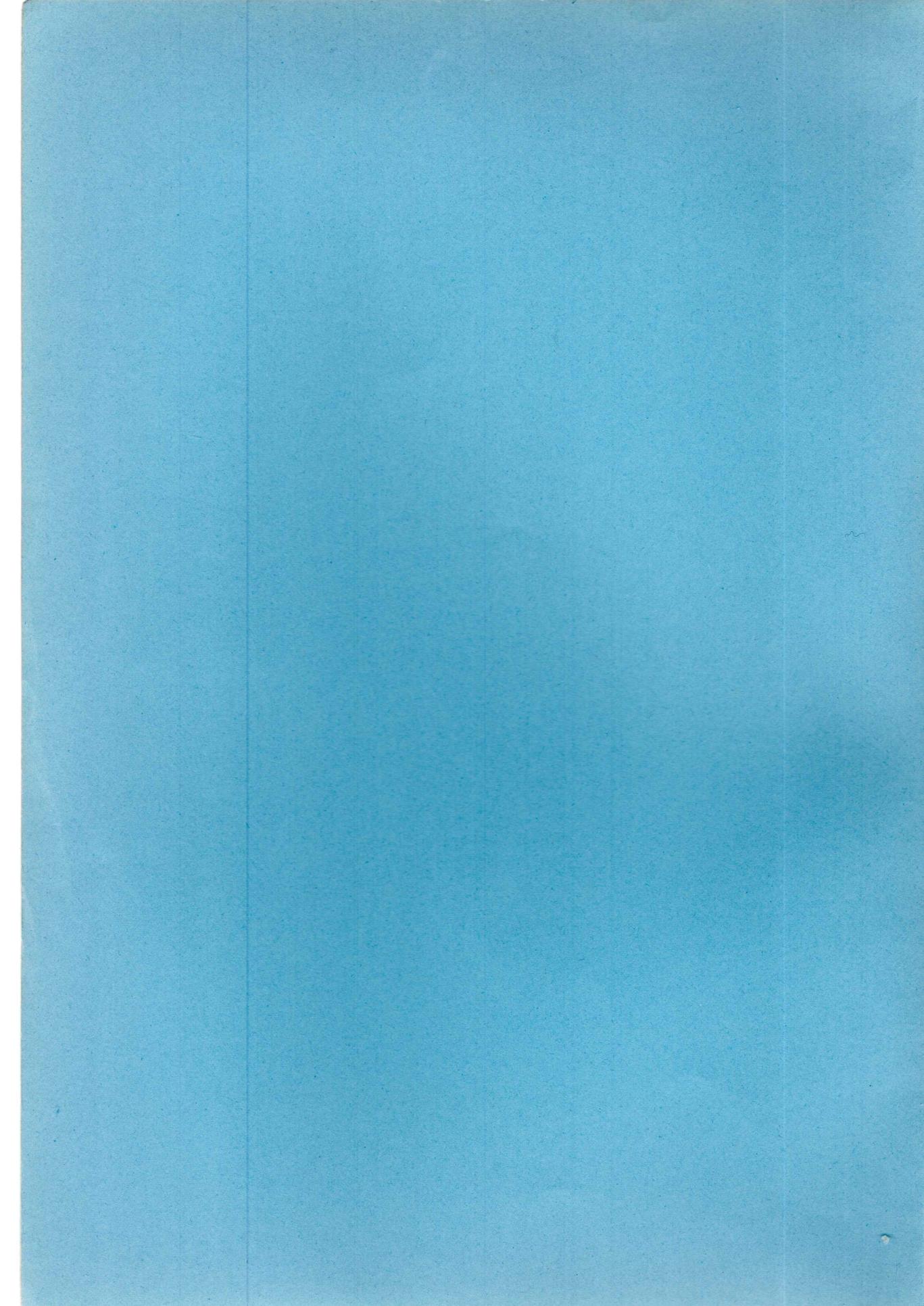
第14巻

昭和56年6月

目 次

あいさつ	会長 大石三四郎	1
講 演		
「学校体育に期待するもの」	甲南女子大学長 鯨坂 二夫	2
実践研究紹介		
「ひとりひとりが生き生きと取り組む授業」		
	大阪府寝屋川市立西小学校 大村 守	14
「よろこびと意欲を持ってとりくむ体力づくりをめざして」		
	島根県仁多郡仁多町立布勢小学校 面曾 豊夫	24
「体育活動のすべての面で自主的・意欲的にとりくむ生徒の育成」		
— 望ましい態度・習慣の育成をめざして —		
	福島県会津若松市立第四中学校 加藤 昭一	38
「体育学習における望ましい態度・習慣の育成」		
— 体育学習における生徒の心情や挫折体験の理解を通して —		
	東京都高等学校保健体育研究会研究局体育部会部長 阿部 修二	50
シンポジウム		
「望ましい態度・習慣の育成をめざす学校体育の効果的指導について」		
	講師団意見特集	64
編集を終えて — 今後のとり組みのために —		69

財団法人 日本学校体育研究連合会



あ い さ つ

(財)日本学校体育研究連合会会長 大石 三四郎

本日ここに研究大会を開くことができましたことを感謝いたします。こんにち、一般、学校その他、精神的な方向にいろいろな問題があるように思われます。

すでにご存じの通り、学校教育におきましては、非行の問題が大きくとりあげられている状態であり、ます。割合に、この身体の部面のことにつきましては、自然科学のいろいろな力を借りまして、いろいろな処置ができるわけでございますけれども、精神方面におきましては、もちろん精神医学もござい、ますが、心理学その他、いろいろな方面でご協力をいただいておりますにいたしましても、なかなか処理のつかないのが現状でございます。今、国立の特殊教育研究所の所長をしておりますが、障害におきましても、目とか耳の部面というものは、科学の力で、こんにち相当のところまで処理できるようになっております。ご存知のことと思いますが、耳・目の方面におきましても、義眼の部面におきましても、すでに物が見える範囲まで追いつめて来ております。耳にいたしましても、昔はとても処理できないと思われる部門まで、補聴器の進歩によって、処理ができておるのでございます。ところが、精神障害者の方面になりますと、なかなかこれは処理が完全についていないのが現状でございます。それと同じように、我々一般健常者のなかでも、案外に心の方面の教育、あるいはその処置に対する研究というのが非常に遅れておるのではないかと思います。殊に、中学期の子供というのは、体が大きくなって1人前になる。精神の訓練がそれに伴わない。そのために、急カーブするような状態に心になるわけでございます。そのために、スピードを出しすぎて障害にぶつかって、いろいろな交通事故を起こすと同じような状態が起きていると思えます。これは何も今日始まったことではございません。昔からある現象でございまして、我々の学生時代にも沢山あったわけであり、ます。今日、こと新しく取り上げることはござい、ませんが、また、ただ最近大きく取り上げられておるにも拘らず、心の部門がかなり遅れているということで、いろいろ問題になっておると思えます。

本研究大会におきましても、躰の問題をテーマにいたしておりまして、いろいろ難しい問題があると思えますが、皆様の創意、お力を拝借いたしまして、大きな成果を得られることを期待しております。簡単ではございますが、ご挨拶にかえます。

(昭和56年1月20日 第19回全国学校体育研究大会開会式より)

講演 学校体育に期待するもの

甲南女子大学長 鱒坂 二夫

はじめてお目にかかる先生方が多いと思う。唯今、誠に恐縮な紹介をいただいた鱒坂であります。大変きれいな花がいけられ、本当にきれいである。しかし、人間の肉体はもっときれいである。ギリシャ時代以来多くの詩人が、この肉体を題材として、多くの詩を作り、絵をかき彫刻をきざんだ。なぜだろう。この肉体の美しいというのは、ミロのヴィーナスを見たと思う。十数年前に日本にきた。わたしも、京都で観たが、近くで観ようとしたが、近づけなかった。多勢の人が観ていたので。遠くから観るミロのヴィーナス。倉敷に大原美術館がある。この近代美術館の庭に、ロダンの「男」という彫刻がある。ブロンズで、頭部はないが、力強く男性が脚をふんばっている。「考える人」これもロダンの作である。ミロの「ヴィーナス」と、ロダンの「考える人」の与える感化はちがうが、非常に素晴らしいものである。それはなぜだろうか。

これは肉体にこもる大きな秘密があるからである。このことを前提にして、一緒に考えてみたいと思う。

先日、2週間ほど前だったか、朝のテレビを見ていた。世界的な数学者広中氏が現れた。アナウンサーは「先生は最近画期的の仕事をしているそうだが……。」とたずねた。わたしは、知らなかったが、それは日本中で数学のできる子供を集め、更にその中の優秀な子供をアメリカに送り、優秀な数学専門家を創ろうという仕事である。ソ連でも同じことをやっているが、わたしは、いいことだと思うが、このようなことが、なぜ日本国内でできないのかと思う。東大・京大があるのに、何故アメリカに送るのかと感じた。それにはやはり訳がある。

日本という所は、勉強がしにくい所であり、アメリカのほうが育成しやすい。音楽ならば、ドイツ・フランスのほうが育ちやすい。こんな背景だからだろうと思った。

問題はこの次の質問回答である。「どんな子供をアメリカに送るのか。」という質問に対し、広中氏は淡々としていった。

「まず第一は健康であること。」アナウンサーも、わたしもおどろいた。

「第二は人柄である。」

「第三が素質である。」アナウンサーは、「素質が第一ではないのか。」と確認したが、「健康が第一である。」ことをつけていた。

「それでは、どの程度の素質が必要であるのか。」という問いに対し、「わたしより、少し数学ができればよい。」とニコリしていた。

この朝、わたしは非常にいい気分であった。世界的な数学者広中氏が、「数学をやるために、健康第一、人柄第二、素質は第三である。」といったのである。

現在、日本の教育をなんとかしなくてはならない。先日、大学入試の共通一次テストがあり、この制度はしばらく続くだろう。現在の中学校・高等学校の実態は、これを目標に進んでいる。民族の将来は

どうなるのだろうか。特定高校・特定大学の入学をめざしたこのような日本の教育は、歪んでいると思う。そう思わないか。これが解決しなければ、わたしは死んでも死にきれない思いである。日本を考えると。

その内助の方法が、健康第一、人柄第二、そして素質は第三といった広中氏の短かい言葉のなかにあると思う。体育こそは、民族を救い、この国の教育を正す大きな力だろう。この大会は、そのような力を結集する大会である。わたしはそのように感じる。

会長に結構なことだと申しあげたが、本当にそうである。現代の日本の学会を考え、思想界を想い、誰もが感じることは、個人と世界を簡単に結びつける、問題がないから。しかし、残念なことは、その間に国家ということが考えられていない。わたしは、田辺先生と西田先生の違いがここにあると思はない。論理の違いは、西田先生は直接的に個とを結びつけ、田辺先生はこの間に主の論理ということ考えた。やはり個人と世界の間には、国家を考えなくてはいけない。こういう意味から、この大会は、大事な意義があると思う。

教育とは、子供たちに生きる力を与え、子供を幸にすることだと思う。生きる力とは何であるか。幸とは何か。教育課程審議会が、昭和48年11月からはじまって3年、答申を出し、それにもとずき指導要領が出て、昨年4月より小学校、この4月より中学校、やがて高等学校が改訂される。この改訂の大きなねらいが3つあった。

第一は、人間性豊かな子供に仕上げたいこと。第二に、小・中・高一貫した調和のとれたカリキュラムにしたい。だから小・中学校・高校・幼稚園そして養護学校も揃っておられる。そして、第三に人間（この人間・人とは「国民として、」とでている）として、基礎的・基本的な力を持ってゆとりのある、しかも充実した教育課程でありたいという三本の柱がある。

豊かな人間性とはどういうものか。調和のとれたカリキュラムとはどういうものか。基礎・基本とは何か。これを正面から考えると当然「体育」というものが浮び上がるのである。あたりまえのことで、「生きる力」、「何で生きている」肉体で生きているのである。誰か参会者の中に死んだ経験者はいないか。わたしも経験はない。わたしの友人（医者）に死んだ経験者がいる。彼は甦きかえったのである。生きるということの幸せをいっている。病気に、友人の病院に入院し、夫人は毎朝看病にきた。ある朝、目がさめたが、子供が呼び寄せられ、夫人は心配そうに手を握っている。脈を取っている医者の友人が、臨終であることをつげている。夫人・子供は泣き出し、脈や呼吸は止まったのだろう。しかし、140億の脳細胞中わずかな細胞が生きていた。そして臨終の言葉を聞きとり、彼はまた「これが死というものか。深い穴へスーと落ちこむ感じがした。」という。しかし、一本の紐に引きもどされたのである。

彼は医者であり、患者がいる。「あの患者はどうだろう。」という責任感・使命感、愛情というのか人間としての、これに引きもどされたのである。そして、どのくらい生きるということが幸せか。

そう思う。肉体で生きているのである。わたしは、母親たちにいうのである。「最後まで、手を握っているように。聞こえているのです。」と。おぼえているのだ。わずかな脳細胞でも。このことは事実である。われわれは生きる、そしてその力は、どうしても肉体ということを考えなくてはならない。根底は肉体なのである。これで動いているのである。

「感情の力」わけてはならない一体のものがある。われわれは、肉体と感情で走るのである。そしてやたら走ってはならないために、ハンドルが必要である。知性・理性というハンドルである。なぜ、子

供が字をおぼえ、九九(算数)をおぼえ、理科や社会の勉強をしなくてはならないのか。これがハンドルの役割りである。

ジッと我慢したり、断固決心するという意志の力が必要である。これがブレーキにあたるだろう。

この4つが、円満にできあがること＝豊かな人間性であろう。調和のとれた人間とは、このような人間だと思ふ。

しかし、その基礎・基本は、肉体と感情がベースである。学習の基礎・基本は、言葉と数であり、やがて函数的な構成ができると、立派な知識の構成ができあがる。であるから、生きるための基礎・基本は肉体と感情であり、学習の基礎・基本は言葉と数である。

教育課程審議会は、ゆとりを持たせようということで、登校日数240日・在校時間7時間(中学校)は、変更しなかったけれども、いわゆる学習の時間を10%減らした。しかし、大事な基礎・基本は絶対に減らさなかった。

10%減らすということで、多方面から多くのハガキが届いた。「減らしてはならない。」というハガキである。新聞でもれたために、こうなったのだが、一番多かったのが「体育」であり、わたしの所だけでも、1m程の高さで2山も届いた。ついで、「美術」「音楽」が多く、多分減らされるだろうという予想からだろう。

減りましたか。わずかに減ったが「体育」と「美術」、「音楽」は減らさない。減らさせない。基礎・基本を大事に考えているからである。小学校低学年の「国語」・「算数」は減っていない。基礎・基本を忠実に守ったのである。

安心していただけたと思う。なぜ10%減らすに当り、「体育」を減らすと考えたのだろうか。体育の教師が、絶対減らさないだろうというのではなく、減らしては困るという心配があったからであろう。

これは、やはり日本の教育が知育偏重になっているからだろう。教育課程審議会は「人間を全体として考えよう。」「生きる力を、まず第一に考えよう。」ということから、あの答申を出したのであり、あの指導要領となったのである。

肉体で生きているのであるから、こうなると「体育」教育は、あらゆる教育の地盤となる教育である。このことは、時間から、現実の問題から考えてもそうである。体育の教育は、今・今日もやっているのだが、その根源は深い。わたしは、今でも学生に『教育学』の講義をやっているが、「いつから人間の教育がはじまるか。」と、試験問題を出すことがある。

多くの学生はすぐに「それはわかっている。子供が母親につれられて、あの桜の花が開く4月。小学校に入学する時にはじまる。」と書いているから、30点とする。子供の教育は、父親と母親の結婚と同時に始まると書くべきである。

母体に10か月いる。すでにこの時から教育は、はじまっている。すでに「体育」ははじまっている。胎内で。「どなたか10か月間の胎内生活の記憶のある人はいないか。」胎内はどうだったのか？

友人に、胎内の赤ん坊の意識をしらべたいという、熱心な医者がある。だから、このような会合がある時、是非たずねてほしいといわれている。一人でも胎児時代の記憶のある人がいたら、学会に貢献するそうだが誰も何もいわない。

私もおぼえていない。静かであるというが、音がしたに違いない。何の音か？。ドゥッ。ドゥッ。ドゥッという母親の心臓の鼓動。唯一の子守り歌。この音を聞いて10か月間。このリ

ズムは一定でなくてはならない。

ド・ド・ド…… となると、胎児は驚ろきヒステリーになるだろう。わたしは、学生にいう。「夫婦ゲンカはお産が済んだ後に、晴々とやれ！」と。学生たちは笑う。しかし、胎教という事実があるのだ。

生まれ出る。新生児は、産声を出す。可愛い勇ましい産声。「生まれ出たら産声を出すこと。」と胎児時代におそわる訳ではない。これは空気をうけた、発声器官があのような音を出す。本能だろうといわれる。

手を握っている。生まれたら手を握っておくことは、誰もおしえていない。本能だろうという。

だかれよう。物をだこうという姿勢をしめす。1か月ぐらいで。このことも本能だろうという。

母親の後をしたって、ついて歩く。女の児が。イヤ男の児も。小さい子供がついて歩くということは本能だろうという。これも胎内では、おそわっていないだろう。もし、これらに対して応答する姿勢がなかったならば、どうなるか。だかれようとしている時にだいてやらないとしたら……。ついて行くこうとする時、ついて歩かせまいとした場合にどうなるか。

わたしの大学に、日本で初めて『自閉症』ということ唱えた黒丸氏がいるが、「問題はそのへんにあるのではないか?。」といている。まだ解決していないが、仮説として。

だいてやらなければならない時にだこうとせず、母親から離してキレイに消毒された真白いベットに寝かせる状態。消毒されたベットだから、病気にはならないと思う。しかし、母親との関係はもうこの時から遠くなっている。遮断とはいわないが、離れている。われわれの時代は、産まれた時、あまり消毒などしてないが、それでもこぎれいなフトンで寝たと思う。多少のバイキンにより、病気となり死亡した新生児はいたが、母親との関係は近かった。だかれようとしたら、だいてくれる母親がいた。後をつけようとする、母親はいつも家にいた。ここに違いがある。自閉症の問題はこのへんにあるのではないかと彼は着眼している。まだ研究しつづけているのだが。

健康とは肉体がつよいだけではない。精神が安定し、社会的な環境条件がととのはなければならないとWHOがしめした。その通りである。

小さな頃からすでにそんな問題がある。人間関係から出てくる問題がある。赤ん坊をテレビで写していると、2週間もするとエクボを出すようになる赤ん坊が多くなる。それはどんな場合か。赤ん坊の目と母親の目がピッタリとあうと、視線の出逢いによってエクボを出すようになるのである。これは大事件である。

われわれは、何とかいう少佐が宇宙を一周してくると大事件という。だかれてほほえんでいる赤ん坊がエクボを出すということも大事件である。視線をはずすとこのエクボは消えるという。このように視線の出逢いによって赤ん坊は影響を受けているのである。

紙に○を2つ書くと赤ん坊はよく見るようだ。そして、この○をタテにして見せると見ないそうである。なぜか。おそらく人間の眼は横に2つ並んでいるからだ、彼は大学生に記録させた。そして、その実験である時間たつと「もう実験は駄目である。赤ん坊は、○印を見ないで私の眼ばかりを見る。」しかし、このことは『大成功なことだ』といったのです。誕生第1日目にして、この幼い赤ん坊が、3つの点を注視している眼力を持っている。最初に見える顔が、母親か看護婦か影響ないとはいえない。誰と出逢うかということが、生きる力に非常に大きな力を与えていると思う。このへんから人間の情緒の安定感がどうなるのかということの問題にシなくてはならない。イスラエル、問題のイスラエルは、

キブツの生活をやっている。たまたま、キブツがあるそうだが、赤ん坊はうまれるとすぐ子供は子供の家につれてゆかれる。青年は青年の家にゆき、家庭は父母だけだという。そのキブツの母親たちが、母親だけ集まって決議したのである。「せめてうまれた6週間は、母のもとに子供をおいてくれないか。」と。赤ん坊の家が信用できないのではない。医者・看護婦そして保母もいるのだから。しかし、今うまれた赤ん坊をすぐつれてゆかれる。母親自身が何ともならないこと。何ともならないが母親は考えたのである。母親と子供の間を。1日3時間だけ家に帰ってくるが何ともならないか。この決議は受け入れられたと聞いている。そんな問題が安定感・自閉症などに関係があるのではないかというから。

私はすでに体育の問題はお腹のなか、いや生れた瞬間からはじまるといつてきた。何を食べさせたか、おかげで元気だが、いくつに見えますか。この前48歳といったが、もう白髪がふえたが58歳というと、半分ぐらいの人は信じる。先ほどの紹介で名誉教授といわれたが、63歳でなくては名誉教授はくれない。山口の女子大に行つて9年、5月になると。2月8日で72歳だが58歳にみえよう。

これには、体育の秘密がある。私はこの年齢になり夢をしばしばみる。それは母親の夢であるが…。
「先生方は見ないか？ 母親の夢を、なつかしいものだ。どんな大きい声を出しても母親とはあえない、夢のなかでなくては。」

私は夢のなかで母親にあえる人は、うらやましいと思う。目がさめた時いつもおいしいと思う。もうしばらくみていたかと思う。妻にいうと家内は、「私の夢はみないのか。」とたずねるけれど絶対にみない。

しかし、母親の夢は非常になつかしい。なぜだろうか。たぶん、母と私の間には何か特殊な関係があったにちがいないと思う。いろいろ考えたし、本も読んでみた。おおよそ、考える力で、愛するという事実がわかるか、これはわかりません。愛は愛さなくてはわからない。信仰は信じなくてはわからない。考えてないものはどうするか。それは経験者に聴くのが一番よい。こんな時は経験主義である。こう思つて母親がまだ元気だったころ、東京に来た時に聴いたことがある。

「今日はそちらに聴きたいことがある。ハッキリおしえてもらいたい。」

「何だろう？」

「お母さんは、いつごろから、どういう訳でわたしが可愛いくなったのか。好きになったのか、愛情をおぼえたのか。」

これは教育の基本問題である。母はすぐに答えた。

「お前は、50歳を過ぎていくつになつたのか。孫もあるというのにこの位のことがまだわからないのか。よくも教育学の講義をするものだ。」といった。

「それは第一に、お前が母さんのお腹の中で動いた時にね。あの時母親になつたという自覚と責任と愛情がわいた。第二はお産の時だった。」

これも意外。お産は大変なことだという。実はまだ、経験はないのだが、どの位くるしんだかというとお前は今日はみょうなことばかりいったが、死ぬほどくるしんだ。若い生命をかけて、死ぬほど苦しんで産むのだ。生まれた赤ん坊に母親が絶大な愛情をそそぐ。文字通り献身的な犠牲。自分は喰わずに子供に食べさせる。着るものも着ずに、娘に着せる。生みの苦しみが愛情に変わった。

「第三番目は、お前たちはお母さんにだかれて、ひざの上で両方のオッパイをすった。母さんの全身はジーンとほてつたが、あのほてりと同時にあの愛情がこみあげた。」

私はよくおぼえている。母の上でオッパイを吸いながら、母の顔をジーとみすえた。赤ん坊はオッパイをすいながら、ウンウンと母の顔を見つめる。若いきれいな顔に汗がいっぱいできている。私の講義に出ている学生に毎年聞く。

「念のためにきくが、君たちの中でおかあさんのオッパイにすいついた気持をおぼえている学生はいるか。遠慮なく手をあげてみよ。」と。

京都大学22年、山口女子大まる9年。いまだ一人も手をあげた者はない。一人も。なんというあわれなことか。だから安定感がたらない。

「しょっちゅう、デモをしたりピケばかりはっているが、これおれはチャンとおぼえているぞ。」

6歳まですいましたからね。〈大爆笑〉3つちがいの弟がいて、こっちを吸っているとこちらから出てくる。お乳が多かったものだから。母は「アーもったいない。早くおいで。来てお前もこれをすえ。」という。明日からもう学校だからもういいだろうと。毎日吸った訳ではない。時々吸ったのだ。わたしのこの唇に母親のオッパイがどうだったかよくおぼえている。何という幸せな男か。人間として生まれて、母親のオッパイにすいついた気分をおぼえている。

こういう気分はない。絶大な安定感がある。ノイローゼになろうとしてもなりようがない。母と子の関係は。母と子の出逢いは。そのお腹で動いた。そのお腹を痛めた。膝の中で、そのオッパイを吸った。直接的に肌にふれる関係である。これは、わたしは母の夢をみてなつかしいと思う。大きな原因である。肉体に関係がある。アメリカ、ウイスクンシン大学のハローという心理学者が、『愛情というものはどうして出てくるものなのか』科学的に証明しようとした。

心理学的な実験室は、ご存じだと思うが人間の子供をつかえば一番ははっきりすることだが、人の子は長いこと実験はできない。人間に一番近い高等動物。当然猿が選ばれた。猿はかしこい奴です。猿が赤ん坊を産みます。この子猿をすぐ母猿からはなす。小さなオリに入れてみている。どんな生活をするのか。子供だからお母さんがほしいだろうと2匹の母親を作ってやった。一匹はビロード製で、目でみて、手でふれてそっくりのお母さん。しかも電流がついて、適当なあったかいぬくもりをもったお母さん。オッパイは出ない。もう一匹は針金をギリギリまいた、つめたい固い針金のお母さん。これはオッパイを出す。二匹の母親と一緒にオリに入れて見ていると、この子猿はどちらのお母さんにだかれているか。当然のこと電流の通じたぬくもりのあるお母さんにだかれておる。このお母さんは、腹が減ってもオッパイはくれないから、腹が減ると仕方なしに、針金のお母さんに行く。お腹一杯のむとまたもとのビロードのお母さんにだかれている。こういう状況のもとに、猿の大嫌いな熊の玩具、この熊の玩具は、時間がくると、ドドンと太鼓をたたくしかけになっている。いれてみる。ドドンとやると驚いたことにどちらに行くのか、どちらの母猿に助けをもとめるのか。決りきってビロードのあたたかいお母さんにとんでゆく。このお母さんをソツとかくしておく。仕方なく針金のお母さんにゆく。両方ともかくしておく。その子猿は母さんのいた所に往って見て、いないものだから、悲しんでいるという。

心理学者ハローは、愛情とはまさに肌ふれあった場合に出てくると結論を出した。私も全面的に賛成する。愛情とは、まさに肌ふれあった時に出てくる。母と子がそうであり、夫と妻がそうであろう。もし夫と妻が肌ふれないものなら、世の中にこんな面倒な人間関係がまたあるものだろうか。毎日毎日同じ顔ばかり見ているのだから。肌ふれあうと、一度ふれあうと一生涯共に行こうかというのだから。大事な人間関係だ。肌ふれあう関係というのは。

肉体にやどる不思議な神秘の力が愛情の根源である。一番大事な教育の土台をなす愛情の根源。肉体とは何かという問題は、ギリシャ以来多くの哲学者の関心の的である。誰一人、肉体とはこういうものであるといい切った人はいない。

心身二元論と一元論とある。デカルトは二元論、ジョンデューイは一元論。その他、ずいぶんと。わたしも一元論をとろうと思う。肉体は外なる精神であり、心とは内なる自然であると。肉体は外なる精神、心が外にあるための肉体。肉体を媒介にして、肉体の表現によって心がつたわる。一元論だとそうなってくる。

だから、われわれは美しい顔をみれば、全人格がいかにも美しいと思うだろう。心がにおうようなあの美しさ。女性にこもるこの神秘。また、はちきれそうな勇気と正義の象徴である若い男性の肉体。肉体について、背後の精神的な価値というものを感ずるのが普通である。やさしさ、しとやかさ、またおおしさ、たのもしさというか、みんな肉体を媒介にしてそれを表現によって現われる。そうすると内なる魂が外に出たものが肉体なのである。それをつよく美しくする。体育のねらいとはこの辺にある。肉体を大事にせよと教育審議会でも、性教育の問題が出た。文部省も性教育のことになるとやっぱりつましやかに、あまり大きな声をお出しにならない。各委員はみんなシーンとなっている。

私はよくお母さん方の会によばれて性教育の話をする。正面から問答無用という。すばらしい力。性の問題。男女が一体になる。こんなすばらしいことがあるか。ただし、これは夫と妻だけでゆるされている。学生にゆうのだが、「男女共学仲よくせよ。われわれの頃はあんなことはなかった。」

わたしは生まれは九州鹿児島。薩摩とは厳しい所である。わたしの母はやさしい母だったが、中学に入った時ハッキリといわれた。

「一つだけいうことがある。勉強をせよとは今さらいわないが……。」何だと思って聞いていると、「今日から中学生。小学校とはちがう。明日から親類の女の子に道であったらどうするか。」と。どうしたらよいかわからないから黙っている。母は「そこだ。」という。「よくおぼえておけ。相手がかっちにおりてきたら、こっちを見て歩け。」という。これは昔薩摩の母の第一の性教育であった。善良な鯨坂少年はこっちをむいて歩いた。だから家に帰って赤い鼻緒の下駄が玄関にあると胸がドキドキしたものだ。どなた様かみえたのかと思って。こっちへきたら、反対をむいて歩いたのだから。結婚とは実にあこがれたものだ。正面から女性をみることができなかったのだから。これが妻を迎える。これは大変な感激！今頃はしょっちゅう、見て見ぬ振りする子はいやしない。側に寄ってもいい。ニコニコしなさい。挨拶もしなさい。同じ机で勉強もよいだろう。同じうたを歌え、雨が降ったら一本の傘で帰れ。結婚をした夫と妻、これも常に一分のスキがあってはならないのだ。どんなに親しくとも10cmは離れておくように、10cmは。

「そら、あの学長の10cmが出てきた。」学生は喜んで笑う。

『先生の教育学はすっかり忘れたが、あの10cm講義は骨身にこたえた。』と答案に書いてある。こんな答案には85点をやる。(爆笑)

人間最大の教育は、結婚後の10cm教育。体育でこれをおしえなくては。道徳などではダメである。体育でおしえなくては。そう思う。裸になる。汗流してやっている体育で。10cmはなれておるようにと。

ローマが減じた。なぜ減じたのか。いろんな原因があったが、一つの大きな原因は結婚ではなくて、10cmがゴタゴタはじめた。ローマ滅亡。国の問題を考えると、真剣におしえなくてはならない。大変な

ことです。

当然体育の中には性の問題ははらざるを得ないと思う。そこでこそおしえなくては。私は中学3年までは、体育の嫌いな子であった。あれは野蛮人か猿がやるものだと思っていた。鉄棒ができない。今でも出来ない。ブラッとさがるだけで、上に昇った経験がない。これは、私の責任ではない。わたしの父母と小学校3年までの先生の責任である。あの頃やらしていてくれたら、今頃は何でも出来ていたと思うが全然ダメである。顔の青白い文学少年であった。4年生の時に東京に移った。小田急沿線に成城という学校があった。今は小さな大学になっているが、昔は7年制高等学校、私どもは第1回卒業生。4年生に編入。とても楽しい学校だった。今の言葉でいうなら「ゆとり」ばかりある学校だった。

あんなに楽しい学校またと有ったか。イヤそこで大変な先生に出逢ったのです。出逢いということは非常に大事ですね。人生すべて出逢いである。男はどんな女に出逢うか。女はどんな男に出逢うか。一生が決まる。子供はどんな父母だったか。遺伝の性質がからまってくる。どんな学校で、どんな先生に出逢ったか。運命である。子供には親と先生を選ぶ自由はなかった。権利もない。全くの運である。

最初に出逢った先生は体操の先生であった。三橋喜久雄というお名前。これは皆さんご承知。明治・大正・昭和についての日本の教育、体育の指導者、恩人である。東京高等師範体育科第1回卒業生。大谷武一先生・三橋喜久雄先生の名前を忘れてはならない。日本ではじめてデンマークに行き、例のニールス・ブックについて、きれいな体操をおぼえて帰国された。

はじめて、私たちの前に立たれた。私は洋行帰りかどうか知らないが、体操教師だからと、半分軽蔑して出ている。正直なところ。ところが立派な教師だった。こんな男とは思った。まるでギリシャ彫刻のような人だった。生きていたのだろうかちょっとさわってみたい感じだった。

30分程生理学の講義をやった。疲労の問題だった。「諸君も疲れたろう。これから外に出よう。この武蔵野のフレッシュなエアーを吸おう！」と。英語をつかったのだ。体操の先生が英語をつかった。トタンに尊敬しましたね。(笑い)とにかく野蛮人か猿と思っていたのだから。(笑い)

子供とは簡単なものである。フレッシュなエアーで尊敬してしまう。それまで体操の先生は英語をつかえばよいものを、ジャンプといえればよいのに、飛躍・飛躍といっていたのだから。洋行帰りは、フレッシュなエアーとみごとな英語で、発音もよかった。外に出たら「気を付け。」といわれ、気を付けをした。「礼！」というから礼をしたら「ちょっと待て。礼とはそんなものではない。」という。何だろうと思った。

「礼とは男と男の目と目の出逢いなのだ。」といわれた。なんと素晴らしい表現だろう。目と目の出逢いといわれた。まるで実存哲学である。また尊敬した。

「目標、永遠の彼方！」ときた。ほんとに尊敬した。(笑い)

それまでの体操の先生は「目標前方の電信柱！ 校舎の右側！」といっていたのが『永遠の彼方』という。

今、日本の青少年にどういう目標を示してやるか。『シッカリ勉強せよ！ 東京大学・京都大学』いけない。こんな目標では。

『生命をかけて勉強せよ。目標は永遠の彼方』とやらなくては。実に感激した。走ってみたら速かった。足が太いから。陸上競技の選手、ラグビーの選手。成城高等学校第1回～第3回の陸上競技大会の100m、200mのテープはこの鰐坂が切った。行ってしらべてみれば、記録が残っている。ラグビー

私のポジションはフルバックである。フル・バックというのは、ゴールの下に唯一人守っている。走るのが速く、キックがうまくて、タックルがうまくなくてはフル・バックはつとまらない。鱒坂青年はそのフル・バックである。

試合の進行につれて、味方のスリー・コーターラインが破られた。敵のスリー・コーター3人がボールを持って走ってくる。どうするか。守るは鱒坂ただ一人。その時のせつない気持というもの、フル・バックをやってみないとわからない。瞬間に決意をする。一定の方向に走る。3mぐらいの所から、バ——とタックルをする。成功すれば、見事に防げるが、タックルをはずされると敵は悠々とゴール真下にトライ。味方は負けとなる。あの精神的な力というもの、ラグビーやらなければ、わからないだろう。

京都大学に入れていただき、そのころの京都大学はたいしたものだった。哲学科西田幾太郎・田辺元・波田野誠一・小西重直、キラボソの先生方が、むずかしい講義をなさった。特に西田先生の講義はむずかしかった。絶対の無とか有とか、わかる訳がない。20歳前後の青年たちが。わたしは、いまでも考えるが絶対の無とは、ラグビーで敵にタックルした時、我もなく、敵もなく、大地もなく、本当に無の境地でタックルしたが、あれが絶対の無だろうとね。

体育の精神が、ただちに西田哲学につながるという、こんな良いことがあるか。ここだ。だから体育はまさに人間教育なのだ。

こう思わなくては、鉄棒おしえたり、跳び箱とんだり、チョット、レコード測ったり、あれではなくて人間の教育なのである。多少、記録が悪かろうと良かろうとたいした事ではない。おいつけようが、負けようが勝とうがたいしたことではない。人間の教育なのだ。

すべて日本の子供が、生きるために基礎・基本として持つ力が、これが体育である。出逢いというのが、非常に人生にとって不思議だということがよくわかった。

わたしはおかげさまで元気である。昔、徴兵検査があった。憲法が兵役の義務を認めた。みごと甲種合格。「シマッタ」と思ったが、重い背囊をしょって何百斤と歩き、泥のなかを、鱒坂の身体はものもしなかった。

大学の紛争もきつかった。折から学部長は行ってたが、団交ばかりやっていた。半年余りも。10名の学部長は1人は死んだ。次々とダウンした。胃潰瘍で。それは胃潰瘍にもなろう。鍛えてなくては。最後まで、頑張ったのはたった3人だった。

教育学部では行ってた。「敵ながら、あっぱれだ。」と全共闘はほめたというのだから。この強い肉体を産んでくれた父・母、その契機となった三橋先生との出逢いというものを、有難いと思う。

弟さん、三橋義雄先生、千葉師範の専攻科をおしえられた。兄さんの喜久雄先生は、毎週1回、千葉師範に出かけて行かれ、弟義雄さんの教授振りをみておられる。台上にピシッと立って、弟さんがおしえておられる。チョット、ボジが出ると「義雄——。」と呼ぶ。専攻科の生徒に「気をつけ。休め。しばらく待っているよう——。」といい、サッサッと走ってゆき、兄さんの前に立ちピシッと「参りました。」「ウン、今のあのおしえ方、こうすべきだ。あーすべきだ。」とおしえる。すると「わかりました。」とかえる。これを見ていた千葉師範専攻科の生徒は、あれが教育というものだろうと、本当に感じ入ったという。肉体の訓練を通じて、人間の態度・習慣・品性というものが養われる。そこである。

いいたい事は、体育をやる若者、その指導者、いやしくもスポーツの選手ならば、あれは立派な人間

だ、と。これはかつての理想であったが、今はどうなっているのか。優勝旗をもらうことが目標ではない。記録をつくることが目標ではない。その品格を作り、人間性をつくりあげることが目標であろう。

三橋先生に出逢った人は、おそらくみんながそのような考えを持ったに違いない。鳥取に参ると、市民体育場入口に若い三橋先生の胸像が彫んである。「あー、三橋先生だなー。」と思い、鳥取に行くと必ず行き、あの銅像を見に行くが、出逢った相手は運命である。

先生方と運命をになって、子供達の内容になる。影響を受けます。特に身体一本で立って行くのだから。身体と身体の大きな示しあいだから。こういうことをおそろしく考えます。肉体・感情と申した。

感情面が全然ダメな人間だった。安定感があったが、情操教育はその学校それっきり、昔鹿児島の中学校では音楽は1時間もなかった。絵は1時間あり、かいた。1年生の時に。

成城にきたら、これは非常にかわっていた。あんな学校昔はなかった。今もないでしょう。毎週2時間、中・高7か年、正課で音楽をおしえる学校である。時の校長柳沢政太郎、主事小原国義といったが、教育の理想のもとに音楽や美術を通して情操を養なおうという。

体育は三橋先生、音楽は音楽学校の先生で、城ヶ島の雨を作曲した梁田 貞先生。一流の人物を呼んで毎週2時間正課で音楽をやる。

試験をうけると、英語・数学はまあ一どうやら人並みにゆくだらう。音楽はやっていない。ヴァイオリンもひけるだらう。コーリュウブンゲンも読めるだらう。まあ一いれてやるから一学期でよいすべて音楽は全部出るよう。早くおいつけというのだらう。私は不愉快になった。音楽学校ではあるまいし、4年生というのに。一学期8時間ですからね音楽を。人をバカにしている。しかし仕方がない。約束だから。出ましたよ。

私は音楽教師とは頭をクジャクシャにして、ベートーベンみたいに神経質ぶって顔の青白いイヤな奴が入ってくるかと待ちかねた。ガラガラとドアーがあいた。入ってこられた先生は誠によかった。

大柄でした。姿勢がよかった。オールバックにして、サッと青くそって、ネクタイをまわし、「お早よう。」といて入ってきた。これはよかった。神経質ではなかった。ピアノの前にすわり、パラパラとおひきになった。いい音がしました。玉をころがす音とはあんな音かと思った。あのような音は京都・大阪ではきけない。東京でなくてはダメですね。

すると1年生が「先生歌ってください。」と気安くいった。私は腹が立ちました。生徒から先生に注文をつける。先生に歌えという。この学校の道徳教育はなっていない。羨は0だと思った。ところが先生は立ちあがり、お歌いになった。まあ一なんとすばらしい声か。こんな声、人間ののどから出るとかと思った。あんな声はやはり東京でなくては。(笑い) 京都・大阪ではだめ。

それもそのはず梁田 貞先生は北海道御出身。札幌に行くと、たしか 小学校といったか、南面の庭に、アカシヤの花が咲いてるその下に、若き梁田先生の銅像が作られている。成城の卒業生が創った像が。ワキには「ドングリコロコロ……」あの曲がきざんである。城が島にゆくと、北原白秋作詞「雨は降る降る、城が島のいそに……。」と碑があり、下に梁田 貞先生作曲と彫んである。

1週に1度成城にみえ、われわれに音楽をおしえなされた。大変な声だった。歌が終って、「今度は君たちの番だ。何をうたうか。」という。今から60年前ですよ。すぐに決まった、サンタルチアを歌おうと。ご承知のサンタルチアです。しかし、私はサンタルチアをこう聞いた。「サン」は悲惨の惨、「チ」は血が出てくると。「惨たる血あ。」まあ一なんとつまらない歌を。血なまぐさい。だから私は

音楽はイヤだといったではないか。私の美的情操はたちまち攪乱されて、私は非常に不愉快になった。しかし、梁田先生はいわれた。皆は歌い出した。聞いてみると惨たる血ではない。きわめてロマンチックな歌である。聞くと日本語ではない。英語でもない。これが独語かと聞いていた。歌が済んだ。私は先生に聞いた。「あれはどこの歌で、どこの国の言葉で歌ったのか。」「君は知らんのか。」「こちらは4年生である。英語文法、サイン、コーサインならよく知っている。「あれは、イタリアの歌で、まさにイタリア語である。」それは Santa Luciaであった。私は本当に恥ずかしかった。Santa Luciaを惨たる血あと血の出るような歌に聞いたのだから、人間として恥ずかしかった。そうとう熱心に音楽に出ました。北海道の梁田先生から、あちこちの国のホームソングをその国の言葉でおそわった。スペイン・イタリア・フランス・ドイツ・イギリス・アメリカ勿論日本と。青年のための大きな宝ですね。

体育で三橋先生に出逢い、音楽で梁田先生に出逢った。そして土台ができた。先生から受けた感化の力だと思う。教育の最後は感化だと思う。

「感化」とは何か。今は深層心理学のすべてが懸命にしらべている。なかなか結論がでてこない。感化とは表面的な浅い世界が変ると違うだろう。前頭葉の働きで、明るい世界、浅い世界、知恵の世界、知恵がついて思想がねれたという世界とは違うだろう。

深い世界、真暗な世界、それは大変な風をひろめ、風が吹いている情動の世界。感情の「情」と動物の「動」、知性・理性で感じてゆけない世界、仏教ならば「煩惱」というのか。こんな世界が変ることだという。

それはわれわれが外から手を加え、盆栽や生け花、人間が力をくわえ考えながら美を構成する。ハサミをいれていい形に剪定してゆく。粘土細工を作る。彫刻をきざむというような外からの力がかえ得るようなものではなからうという。それは子供自身が自分で内面的に変る。内面的自己革命であろう。

今いった子供は一番よく変る。教師や親は何をすればよいのか。変ってゆく子供ならほっておいてもよい。そうはいかない。一番よく変るような条件と刺戟を整えなくてはいけない。それは何か。

そこで、私は若い頃に読んだドイツのすぐれた哲学者ディルタイの言葉を思い出す。たくさんの哲学書をかいているなかに2冊教育学の本があるが、そのなかにこんな言葉がある。—「われわれが他人に対して与える感化とは、如何にわれわれが自己を他人のために犠牲にしたか。その犠牲の程度で決まる。」—と。

親や教師はどの位自分を子供の犠牲にするか。これで子供自身が内面的に変わってゆくのだという。教育の一番大きな秘密がここにある。母と子がそうであり、教師と生徒がそうでなくてはならない。

これがないと、金属バットで親をなぐり、先生を集団になって暴行してみたり、こんな問題はどうなっているのだ。こういう問題をとく一番の鍵はやはり、身体ごとぶつかってゆく。特に体育というものを媒介にした、それと情操というものを媒介としたこの基本の力というものが、このへんに、これらをとく鍵があるのではないか。体育はただ肉体を強くするのではない。当然肉体は強くなるが人間性というものを、品格・人格こういうものをくっきりと確かめる一番に大きな問題なのだろう。

数学・社会や英語でできない人間形成の問題があろう。生きる力の基本はそこにある。私の友人辻村君というのがいて、立派な男だったが高等学校の後輩だが、横須賀の近くにできた国立の特殊教育総合研究所の所長をやった人で、亡くなったが、おいしいことをしたと思う。亡くなる前の年に岡山中、新幹線でバッテリーあった。

「イヤしばらく。こういうことがありました。」と息はずませていうには、
「年齢は中学校2年生の子供が入ってきた。全然自分で物が食べられない。当然イロハも九九もいえない。まず、この子供には食べる事から教えなくてはいけないということで神経をすりへらした。どうしても食べない。こちらがハシでスプーンでやらねば食べない。ある若い研究員がこうしたらどうかと提案した。

その子を囲んで、手づかみで食べてみようかという。手づかみです。この提案をやってみようということで、4～5人テーブルにつき、その子をつれてきた。誰もやった。彼辻村君もやったのです。そうしたら、その子が自分で手づかみで食べたというのだ。みんな万才とさげんだという。」

今日できた印刷物を拝見すると、脳性マヒの子に水泳をおしえたと、本当に涙の出るような記録がある。知恵のおくれた子供にどうやって体育をおしえるのか。辻村君がいった、手づかみで食べたらその子供も食べた話を思い出して、本日のこの集会は養護学校・幼稚園・小中高校みんな先生方ちがった領域で、しかし心を一つにこの国この子供たちの肉体、これにやどる魂をどうするかという大事な、真剣な集会であり、私も感激して参った次第である。

どうぞ、先生方御自身の健康に注意し、子供の前に出る場合、ご自身が健康でなくてはならないと思う。そして「どうだ！ おれを見よ。おれのようになるのだ。おれについてくれば間違いないのだ。」と、この姿勢が大変大事なのではないかと思う。

ラグビーで、この前京都の伏見工業が勝った。わたしは嬉しくて嬉しくて、京都ですから。あの山地監督が男泣きして「ワー勝ったぞ。」とやっていた。

どうぞ子供たちがラグビーでなくて、本当にすばらしい体育の時間「おーよくやったぞ。」と泣いてやってください。これで子供たちは何時か体育の時間が大切か悟りますよ。言葉ではなくて、肉体で、表現で子供の魂をゆり動かして、基本的な人間形成これが体育だと、そのように子供たちにおしえてやってほしいと思います。

ありがとうございました。

— 以上 —

研究主題 「ひとりひとりが生き生きと取り組む授業」

— 確かな力を育てる —

大阪府寝屋川市立西小学校 大 村 守

I 発 表

1. 研究主題について

近年、子どもたちをとりまく生活環境は、時間的にも空間的にも物質的にも弾力性や創造性を伴わなくなってきた。

テレビ、塾通い、交通地獄と、子どもたちの生活を豊かにするような気配はないように思われる。

私たち、西小の子どもたちにも生活に落ち着きのないことを毎年のように指摘されてきている。

個人主義、目の前の楽しさを追い求める、作られた遊びに夢中になる……等、例に漏れない。

しかし、子どもたちの目標に向かって努力する姿、何度も何度も挑戦しながら高まろうと努力する姿、そして、やりぬいた喜びが次の力になって生き生きと取り組んでいる姿、それぞれの立場をぶつけ合う中で、友だちやグループの励ましにより高まろうと努力する姿に、自分の可能性を自分で努力して掘り起こしていこうとする子どもの自信に満ちた表情や、落ち着きのある態度を見ることができ、確かな力が育ちつつある手ごたえを少しではあるが、感じている。

私たちは、自分の努力や友だちの協力によって確かな力を育て、掘り起こしていくことが、どんなに楽しいことなのかを、感じさせること、教えることが今こそ大切なのではないかと思っている。

子どもが自分自身の値うち（立場）を認識し、自分の可能性を自分で努力して掘り起こす。

そこには、今、自分が何をすべきなのか、という確かな判断力を強いられる。そして、努力してやりぬいた喜びは、次への意欲や生活に落ち着きをもたらす情緒の安定を確立するであろう。

確かな力を育てていくためには、子どもの全生活をゆり動かすような感動にあふれた授業を組み立てていかなければならない。

そのような授業は、何によって可能なのか、私たちは、子どもを知ることであると考えている。

子どもひとりひとりが、何にひかれ、どのようなことにこだわりを持っているのかを適確につかみ、子どもの心や気分を感じられるような教師にならなければならない。

そして、教材に対する教師の考えや願い、指導性を発揮することが大切である。

このように仕組まれた授業の中では、自分自身の課題を追求している過程で、新しいことがらを知ったり、新しいことに気づいたり、新しいことを覚えたりする面白さを知っていくであろう。また、それぞれの立場がぶつかり合う中で、友だちのよさや、仲間の大切さを発見するであろう。

このような学習の面白さや高まろうとする心、友だちを認めていこうとする姿には、明るさや自信に満ちた落ち着きが見られるのではないだろうか。

ひとりひとりの子どもが生き生きとした授業、すなわち、自分の可能性を自覚し、自分の値うち、仲間の値うちに目ざめていけるような授業を、子どもと教師がいっしょになって創り出すことにより、感性豊かな子どもに育ち、確かな力をつけていけるのだろう。また、教師も豊かな教師として、成長でき

るのではないかと考えている。

2. 各部会の取り組み

1. 低学年部会の取り組み — 新しい動きを見つける楽しい学習 —

○低学年部会テーマについて

子どもというものは、本来、創造性豊かで、遊びを見つける天才である。一つの物や場をいろいろなイメージでとらえ、次から次へと新しい遊び（方法、難易度）を見つけ、いつまでもあきずにやっている。

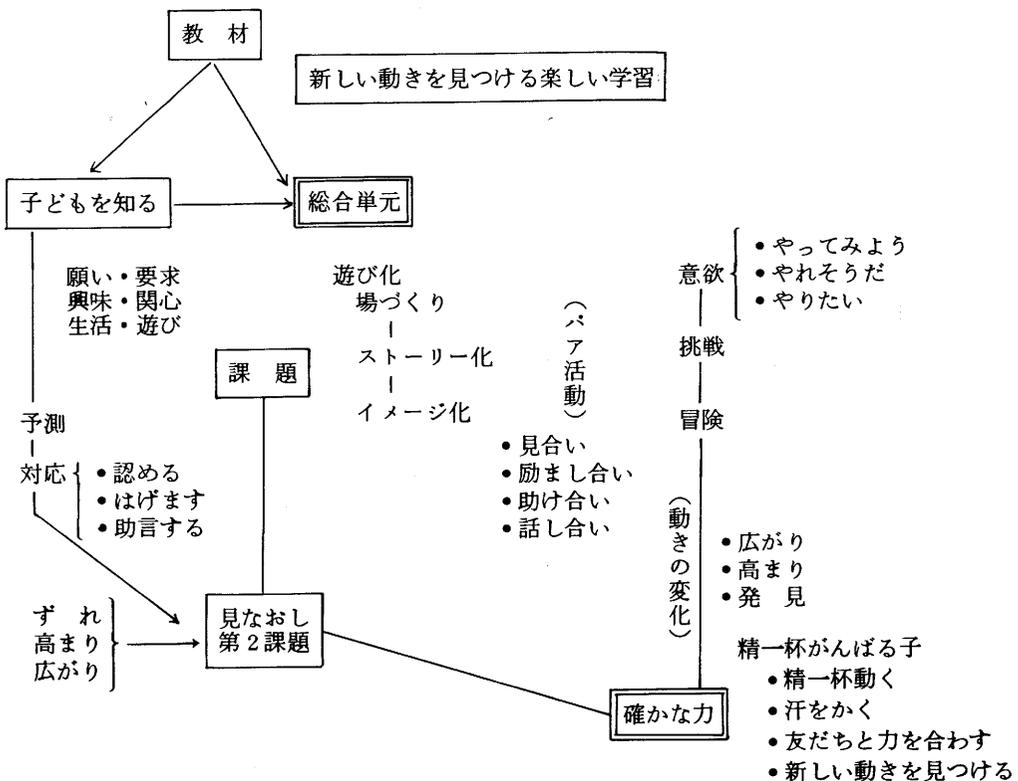
その特性を生かし、体育の授業の中でも子どもの意欲を最大限に発揮できる場として、総合単元を考えてきた。

つまり、今までの授業のわくから発想の転換をおこない、教師の持つ許容範囲をできるだけ広げていく。そして、教材を遊び化することによって「おもしろそうだ」「やってみたいな」と、やるきをおこさせるひきがねとなる。また、子どもたちはいろいろな場で楽しく遊ぶことにより「ぼく、こんなこともできるよ」「わたし、こんなこともできるようになったよ」と、新しい動きを見つけ出したり、挑戦したりしていく。

その中に、子どもならだれでもが持つ自由で伸び伸びとした姿が見られるのではないだろうか。

低学年部会では、そんな子どもの姿を求めて研究を進めている。

○授業の構想図



○総合単元

低学年の子どもたちには、基本的な動き作りを中心に、どの領域にも発展できる総合的な体を培ってやるのが望ましいと考える。

そこで種々の遊びを組み合わせるにより、どの子どもも学習に参加し、生き生きと精一杯動ききる場の設定を考えていかなければならない。それには、各教材の特性をふまえ、子どもの実態や教師のねらいにより、教材の組み立てもかわってくる。子どもたちが喜んで挑戦していく教材化が望ましい。〈とび箱運動を主にした場作りを考えたとする〉

単元は「りんごとりに行こう」「遠足〇〇〇〇」などのストーリーの中で、とび箱を山や丘や岩や石に見たてることにより、子どもたちの動きの中に、またぎ越し、ふみ越し、横とび、とび上りとびおり、腕立てとび上がりとびおり、腕立てとび上がりとびおりのいろいろ（高さにも関係）、腕立て閉脚とび腕立て閉脚とびなどいろいろな動きが生まれてくる。その動きは子どもたちの運動経験に応じて、次々と作り出されてくるのである。教師が、こんな動きと言わなくてもとび箱の場の設定によっていろいろ工夫した動きが作り出される。その中で友だちの動きをお互いに見合い、まねたり、さらに工夫することにより、その動きは広まり、動きの質は高まっていくと考える。

〈自分なりの取り組みが工夫できる〉

子どもたちは、一つのストーリーの中で個々別々のイメージを持って、山や丘、岩、石を乗り越えていくと考える。また、一つのものも昨日の動きとは違った動き（イメージ）で今日は動いていく姿を見ることがある。子ども一人一人に、具体的なイメージを持たせることによって、昨日の動きをかえさせていくことになる。すなわち、動きを通して一人一人がめあてを持って、主体的に取りくめる様にさせていかなければならない。

このような総合単元を扱うなかで、新しい動きが生まれ、動きが深まり、技も高まると考える。結果子どもたちには満足感を与え、運動が好きになることができ、丈夫な体を作っていくと思われる。

以上のことから、場作りの大切さがよくわかると思われる。

＜場作り＞

場作りはいつも同じであってはならない。教師のねらい、子どもの動きの高まりによって、場作りの変化が必要となってくる。

- ① 教師が与えた場
- ② 教師と子どもたちが考えた場
- ③ 子どもたちが考えた場

など、学習を進めていく中で、自分たちの場作りを工夫していくことが大切である。

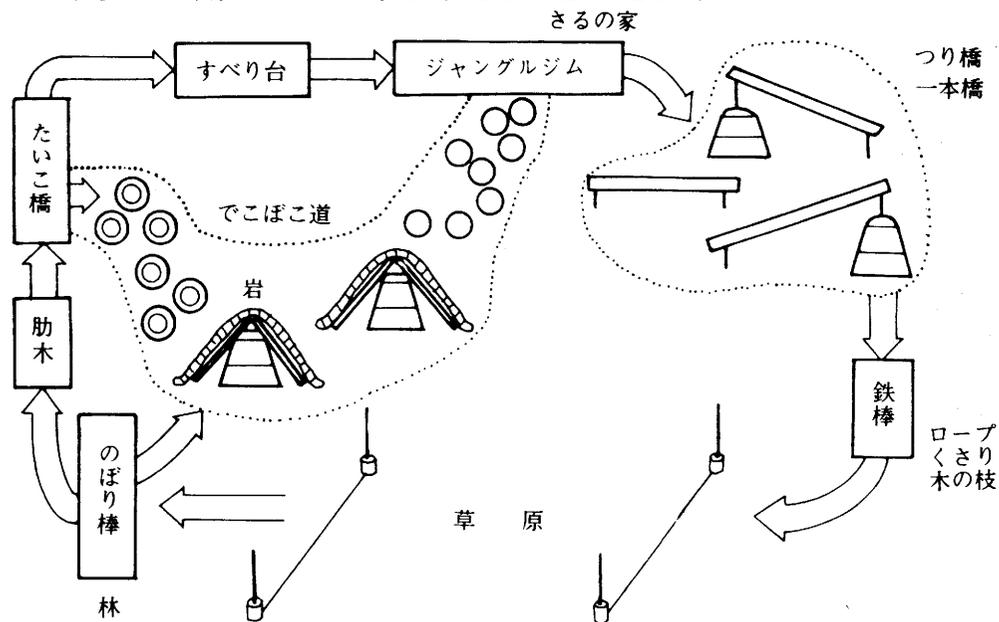
総合単元では、子どもたちが極限まで身体を動かし、新しい動きを見つけ出していくため、子どもたちひとりひとりがイメージを持って動くことが大切である。そのためには、場作りとともに、1単元、1時間をひとつのお話（ストーリー化）にしていくことである。

- ・教師と子どもたちによる場づくり・お話づくり

〔2年 おさると遊ぼう ― 力だめし・歩走跳・遊具遊び〕

春の遠足、枚方パークでの楽しい経験から「おさると遊ぼう」と題し、グループで場作りを始めた。

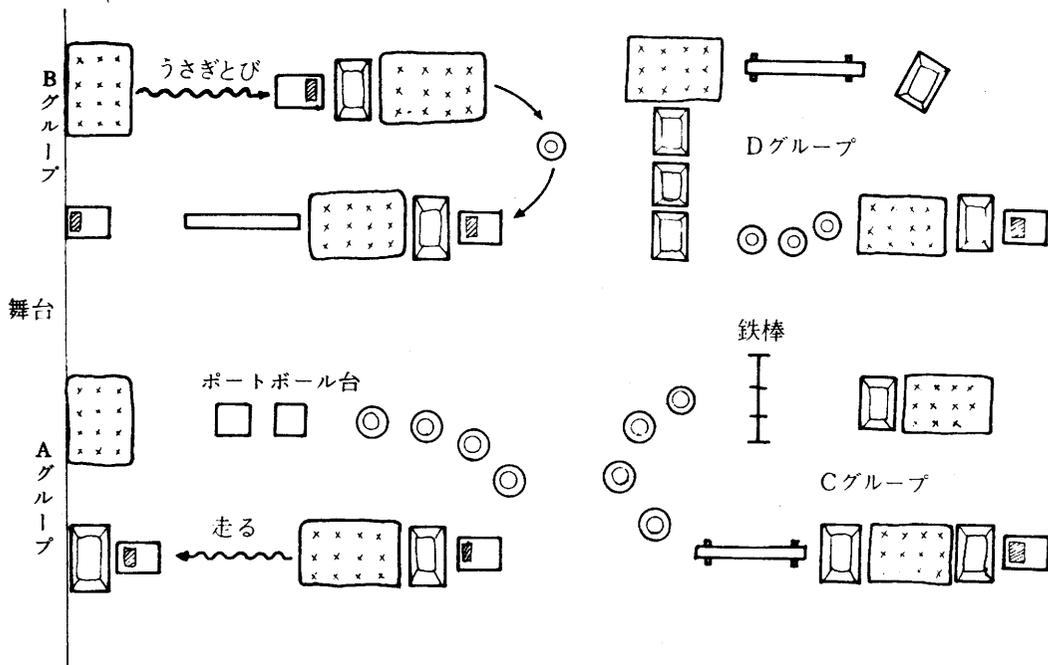
「枚方パークには、でこぼこ道もあったよ」「岩や山も作りたいな」の子どもたちの話し合いから、タイヤ、輪、マット、とび箱などを用意して場作りをした。この中に、歩走跳の平面での動き作りは初めてであるので、教師より草原のイメージを与えて歩走跳の学習の場とした。



• 子どもによる場づくり

〔2年 遊び場づくり〕

とび箱での安全な着地を願って、教師は、「とび箱を使って遊び場をつくろう」と、グループに場作りをゆだねた。



2. 中学年部会の取り組み — ちょっとびり考え、助け合う授業 —

中学年の時期の子どもたちは、何でもやってみたい、試したい、友だちと一緒に何かをしてみたいという気持ちが大きくなり、動きも低学年より一層活発になってくる。

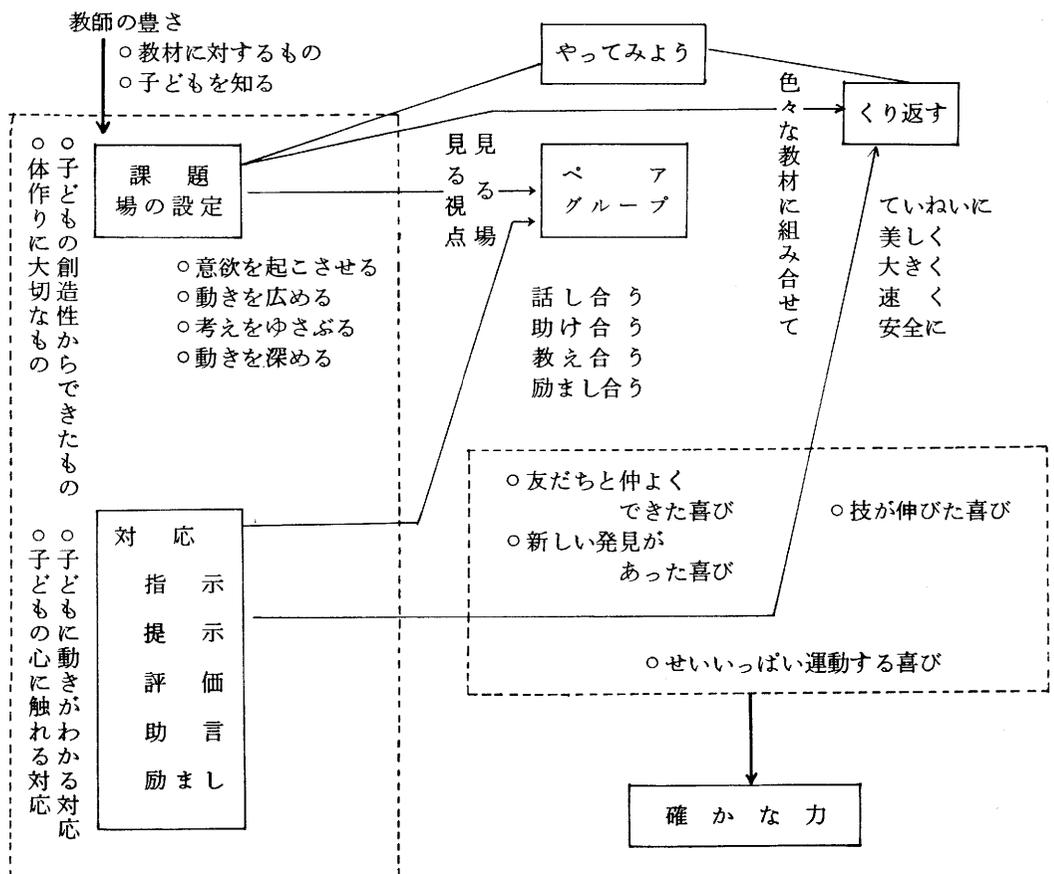
しかし、やってみたい、試みたいと行動しても、やろうとすることが難しくかったり、友だちと意見が合わなかったりすると、途中であきらめたり、挫折してしまうことも多い。また、友だちとやり方や考え方が食い違くとそこで喧嘩が始まり、成し遂げることなく終わってしまうことも多い。

体育学習の場でも、三年生は色々な場で、色々な動きをすることを望み、4年生では高学年的になり色々な場で楽しく動きたいという気持ちもあるが、一つの動きを自分なりに高め、練り上げていきたいという気持ちも強くなってくる。

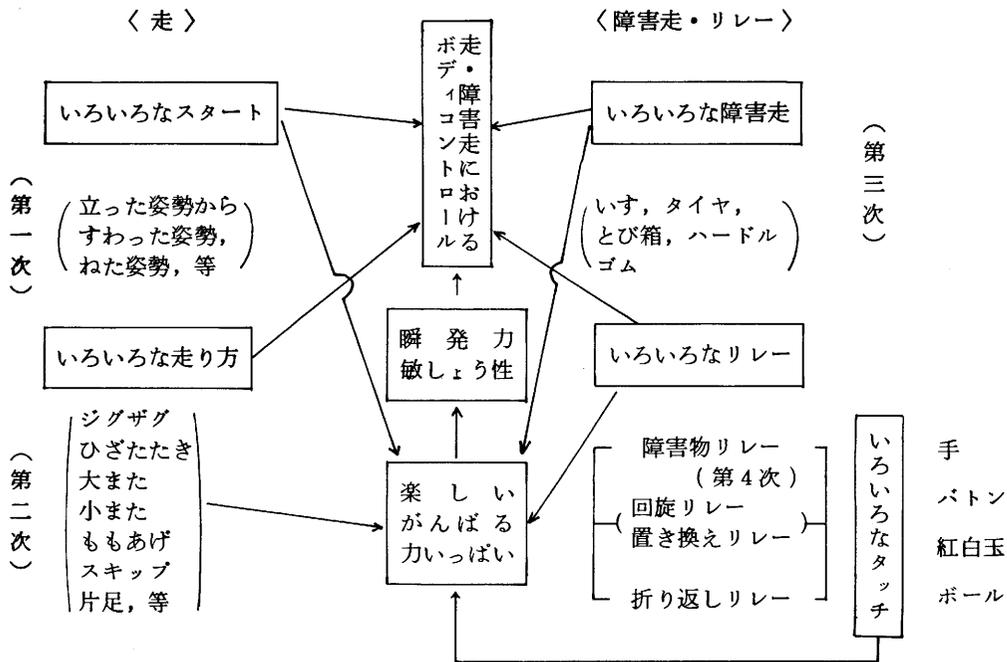
そこで本年度は、低学年で培われつつあった基礎的な動きを更に深めつつ、確かな動き、ねうちの動きに練り上げさせていこうと考えている。また、低学年の時には、色々な動きを認めてきているので、動きの高まりや技を磨くことへの見合い、励まし合い、助け合う等の活動に慣れていない。

そこで、中学年では、友だちと互いに励まし合い、助け合って学習する楽しさを感じさせていこうとしている。この様な2つの大きな柱を追求していく中で、めあてに向って自ら努力する態度や、友だちを大切にしながら共に学ぼうとする心情を育てていこうとしているのである。

○授業の構想



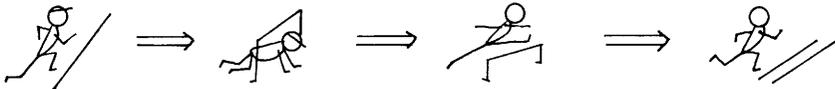
○指導計画および授業の組み立て（教材 かけっこ・リレーの工夫）



○展開 ③ ハードルをくぐったり, とびこしたりする。(障害走)

どうしたら, うまくくぐったり, とびこしたりできるだろうか

ハードルを並べた班から練習する



(スピードをできるだけゆるめないでくぐるか) (両足ふみきり) (ゴールを思いきり走りぬけるか)
 (頭からすべりこむみたいにする子がいるかな) (またぎこし?) (り走りぬけるか)

スピードがおちない

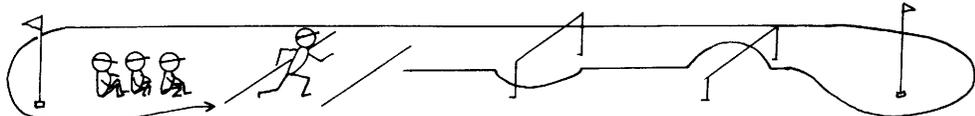
- 班で話し合ったり, 工夫できるだろうか
- 動きながら話し合いのできる班があるかな
- ハードルにさわらずくぐるかな → (井上くん, 中村くん)
- ハードルに足をひっかけず, とびこせるかな → (橋本くん, 中島さん)
- 手をつけて, くぐるかな → (松田さん, 松本さん)

一斉に走り, 自分の速さを確かめる …………… 数を数えてあげよう。

○授業後の取り組み

前時において, ねらいをリレーにおける紅白玉の確実な受け渡しにおいていたが, 授業の中で, 子どもたちのハードルのくぐりぬける様子を見てみると, くぐりぬけ方が様々であった。そこで, くぐりぬけ方に焦点をあてた授業に切りかえた。ハードルをくぐるのに, 頭をうつとか, 背中をうつといった不

安から、ハードルの前でスピードをゆるめ、そっと横向きになってくぐるが多かった。そこで、ハードルをゴムに変えたら、痛くないという安心感からか、頭からすべりこむ形が出てきて、スピードも早くなった。そこで、第4次にリレーをし、紅白玉やバトンの確実な受け渡しへとつなげた。



バトンを確実に受け渡しすることから、スピードをおとさず、次の走者にバトンを渡すことができるようにした。少しずつリードする子も出て来て、リレーゾーンの使い方も考えるようになって来た。

決められた時間(曲を流す)に何人の人が走れるかなどにより、班の意識も、自分たちの班の記録に挑戦するようになった。

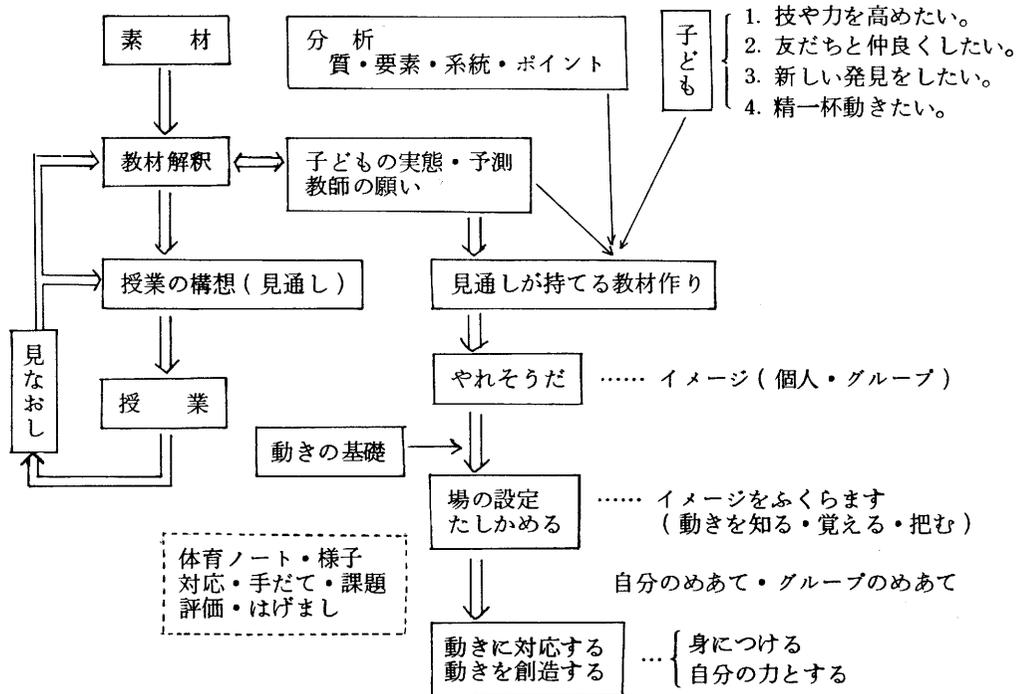
3. 高学年部会の取り組み — 見通しを持って取り組む学習 —

○高学年部会テーマについて

ひとりひとりの子どもが生き生きと学習に取り組み、課題を追求し、自分を変えていくことのできる過程を創りあげていくこと — 確かな力を育てること — が、私たちの子どもへの願いである。

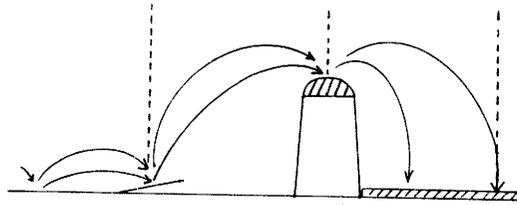
そこで、低・中学年で指導した、総合単元・動きの練り上げを基礎にして、教材のイメージ(勉強して、こんなになりたい……個々の動きや集団の動きに対する未来の姿……)をふくらませ、イメージを実現していくために、自分の課題を持ち、それを動きに表し、主体的に追求する学習 — 見通しを持って取り組む学習 — をめざして研究を進めてきた。

○授業の構想図



○腕立て閉脚とびこし 〈自分の力に合う安定したとびこし方をつくり上げよう〉

腕立て閉脚とびこしの基礎は、両ひざのひきつけと、両腕のつきはなしのうさぎとびであると考えらる。うさぎとびを通して、腕のつきはなし、足のひきつけ、助走からの踏み切りの入り方、踏み切り・空中への体の投げ出しなど、一つ一つの動きを見なおしていくことができる。この教材では踏み切ってから手をつくまでの空間、手のつきはなしから着地までの空間に目を向けさせ、ぼくの、私のとびこし方をつくり上げる中で、助走、踏み切り、手のつき、手のつきはなしなどを工夫してもらいたい。



- 助走から踏み切りへの入り方
第一踏み切り・踏み切り板の位置
- 踏み切った時のジャンプの方向・高さ
- 着手のタイミング → 第一空間の空中姿勢
- 手のつきはなし → 第二空間の空中姿勢
- 着地

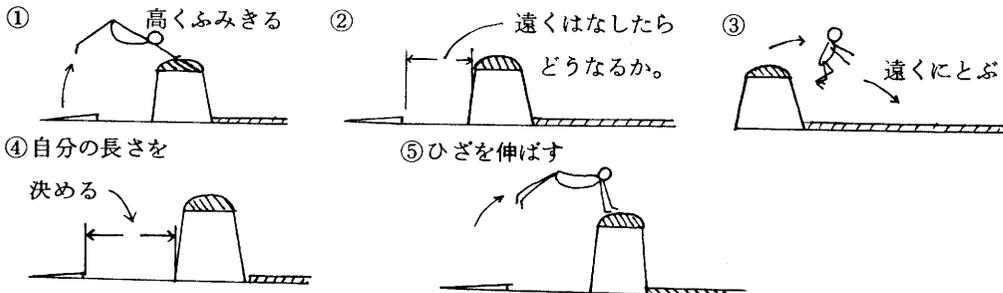
○学習計画及び学習経過

学習課題をつかもう (20×2)

見通しを持って取り組むためにビデオにとり、自分の姿を返り、学習の課題をつかませると同時に学級の実態を知る。とびこせない子 5名、その他踏み切りが合わない、両手が残る、着地が前のめりになる等の問題点を見つけるとともに、フォームに対して願いが少ないことも知る。

安定したとびこしをしよう (20×3)

自分のとびこしの問題点を解決させることが、自分なりに工夫したとびこしに近づく第一歩と考え、準備運動の工夫(うさぎとび、うまとび、3人組手つなぎとび、舞台とび上がり)・自分の踏み切り位置・手のつきはなし・安定した着地を自由に練習させた。その過程で、目の位置、手のつきはなし、足らう全体で着地する等の工夫が多く出てきた。しかもそれ以上にすばらしい取り組みが多く出てきた。

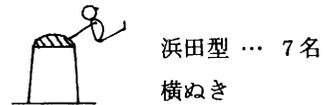
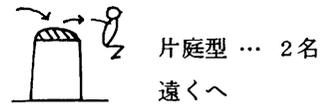
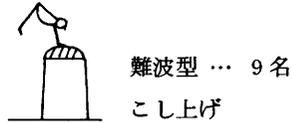
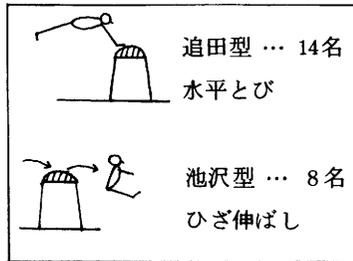


自分のとびこし方をつくらう (20×4)

安定したとびこしを練習する過程で、子どもの動きのすばらしさに気づき、全員で取り組む。

○結果と反省

- ① 自分なりのとび方を追求しているので、楽しそうにできた。
- ② 補助運動や用具の工夫が多く出た。ひざを伸ばしたうさぎとび、舞台を使ったとび上がり、その他、自分のとびこし方のフォームを考えた練習になった。
- ③ 子どもの追求の型と人数（型は子どもの名前をつける。）



また、1つの型にとらわれず、自分の型を作ろうとしたり、色々な型をまねたり、ひねりを加える子どもまであらわれた。

感想から — 全部自分でやるということは、すごく勉強になるみたい。まずとぶ前にあしを伸ばすうさぎとびなど練習して、うまくいったら、とび箱でやった。踏み切り板の位置も考えた。また友だちも思ったことを言ってくれたので、楽しい勉強ができた。

3. まとめと今後の課題

この研究の過程で、私たちは、子どもひとりひとりの精一杯の生き方を知り、教師の生き方（子どもを見る目、子どもの姿を知る方法、子どものつまずきの心を知る等）も変えざるを得ない状況を生み、教師も大きく育ったと確信している。しかし、教師が子どもを凝視し、子どもに学ぶことの困難も肌で感じた。今後、凝視を深め、子どもの生きる願いに対応し得る教師に育ちたい。なお、本稿は紙面の都合で、低・中・高学年部会の特性と、研究内容の一部の実践を主として論述しています。全体を読み通して、本校の研究内容をおつかみ願えればさいわいと考えております。

Ⅰ 質疑応答

(質問) 神奈川県 愛甲

総合単元の中における技能の高まりはどうか。場作りだけでよいのだろうか。(P14, 16)

(答え)

技能面でのかわりは考えていない。その子にとって必要と思ったときにのみ、かわるようにしている。場作りでは、調査研究中。

Ⅱ 指導・講評

筑波大学教授 大木 昭一郎

10年間の取り組みについては、たいへん立派であるが、研究の観点から見ると焦点がぼやけている。総合単元というが、基本の運動のすべてを総合単元で処理しているのか、また、年間計画の中にどのように位置づけられているのか、よくわからない。基本の運動についても、子どもの興味だけで追究していくものではない。

横浜国立大学教授 高田 典 衛

どうして遊ばなくなったのか。

昔の子どもに比べて、遊びは非常にふえてきている。時間的にも種類も。しかし、外に出ることが減っている。働くこともしなくなった。特に家庭で。これは、大量の時間室内で遊んでいることで、室内でのおもしろい遊びがふえてきている。テレビであり、まん画であり、機械遊びである。そして、そのちがいに、親も教師も気づいていないことが多い。時に、先生と親が施設や場所を確保し出すと、子どものはうがびっくりしてしまう。

教師も、遊び時間に外へ出なくなった。先生が外に出ると子どもも出る。外遊びが多くなれば、外の遊びにも楽しさのあることがわかってくる。しかし、こうなるには、ほぼ10年かかるだろう。

島根の学校の場合も、施設を作ったから子どもたちがやるのではなくて、先生が出ていったのだろうと思う。施設があれば子どもたちが動くだろうと放置しておいたら、子どもが自然に動かなくなったという例が多い。

研究主題 「よろこびと意欲を持ってとりくむ 体力づくりをめざして」

島根県仁多郡仁多町立布勢小学校 面 曾 豊 夫

I 発 表

1 はじめに

本校区を持つ、仁多郡は鳥取、広島、岡山県の県境に位置し、海拔300m、島根県の南東奥出雲の地にあり、八岐大蛇（やまたのおろち）で知られる天叢雲剣の神話と奇勝鬼の舌震い、要害山などの史跡を持ち、山紫水明の自然に恵まれた地域にある。校区の人口約2000人、戸数470戸の農山村であり、児童数165名、普通学級6、特殊1、教職員11名の小規模校である。

本校は昭和50年度から体育指導について継続的に研究を重ねてきたが、昨年度より文部省体力づくり推進校を受け、その実践活動を進めてきた。

本校児童の体力は運動能力、体力診断テストの結果から見て年々向上し、全国平均なみになって来たが、激動する社会に生き抜くためには、先ず何よりも力強い体力が必要であり、体力づくり活動の重要性を認識し、調整力、筋力、持久力等の強化、忍耐力や積極性等の強い精神力の育成、細胸等の体位不足を補強し強くたくましいからだと心づくりを本校の実態や将来の教育の展望に立って考え、強制的な鍛練でなく、子供の自主性、創造性、あるいは興味や意欲を喚起させ、進んで体を鍛えようとする態度を育成し生活化にまで拡げ高めていきたい。

そのためには、体育科を中核にし、学校生活の場に拡げ、業間体育や全校活動における体力づくり活動を推進し、更に、地域ぐるみ、家族ぐるみの活動にまで高めていく取り組みを進め定着するよう努力している。

2 学校経営方針

(1) 全職員参加の信頼と協調に支えられた学校運営

イ 使命感にあふれ、奉仕的精神に生きる教師

ロ 子どもに生きる研修を推進する教師

「わかる」「できる」の喜びと意欲をもたせる学級経営

ハ 子どもとともにとりくむ教師

つきこむ教師からひき出す教師

子どもの喜びと感動を育てる教師

あやまちをみすごさずきびしく指導する教師

(2) 環境の整備と施設設備の活用

イ 創意と工夫に満ちた環境づくり、きれいな学校づくり

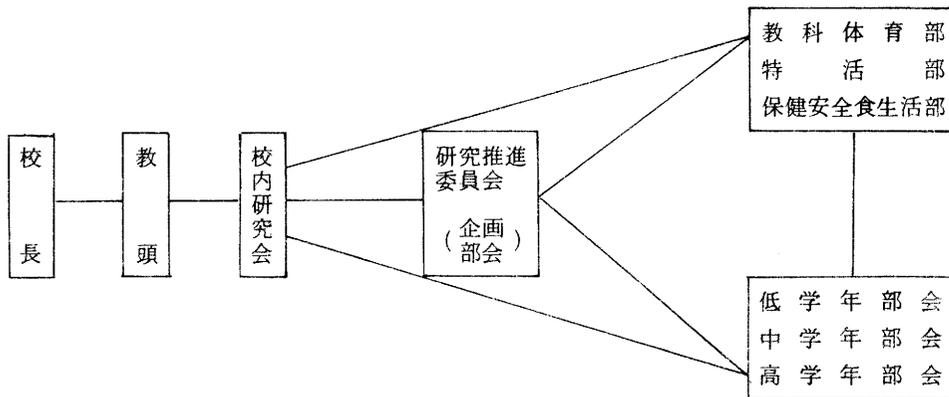
- 既設設備の活用と工夫
- ハ 地域社会との連携，P T Aとの協力による学校づくり

3 本年度の重点

- (1) 人間性豊かな子どもの育成
 - イ 基本的生活習慣やしつけ指導の徹底をはかる
 - 学校同和教育を推進し，仲間意識（連帯感）の高揚に努める
- (2) ゆとりのある充実した学校生活の推進
 - イ 基礎的，基本的事項の指導徹底
 - 一人ひとりの可能性をのばす学習指導の研究
- (3) 体力づくり推進
 - イ 体育の授業研究を通し学習指導の改善をはかる
 - 業間及び課外体育活動を推進し，体育の日常化，習慣化をはかる
 - ハ 保健活動を充実し健康教育を推進する
- (4) 保護者，地域との連携強化につとめる
 - イ P T A活動の推進
 - 学校だより，学級通信等による家庭との連絡
 - ハ 授業参観及び学級懇談会による指導連携

4 研究組織

(1) 組織



(2) 研究の分担

- 校内研究会
 - 各研究部が有機的につながりを求めるために職員が共通理解をはかる場とする。
- 研究推進委員会（企画部会）
 - 研究主任を中心として構成され，研究全般についての企画，立案，調整をはかる。
- 学年部会

各部会での検証，計画にもとづいて学年相応実践のまとめを行う。総合的な体力づくりを行なうためには，行動体力面の強化だけにとどまらず防衛体力面も進めていかなければならない。

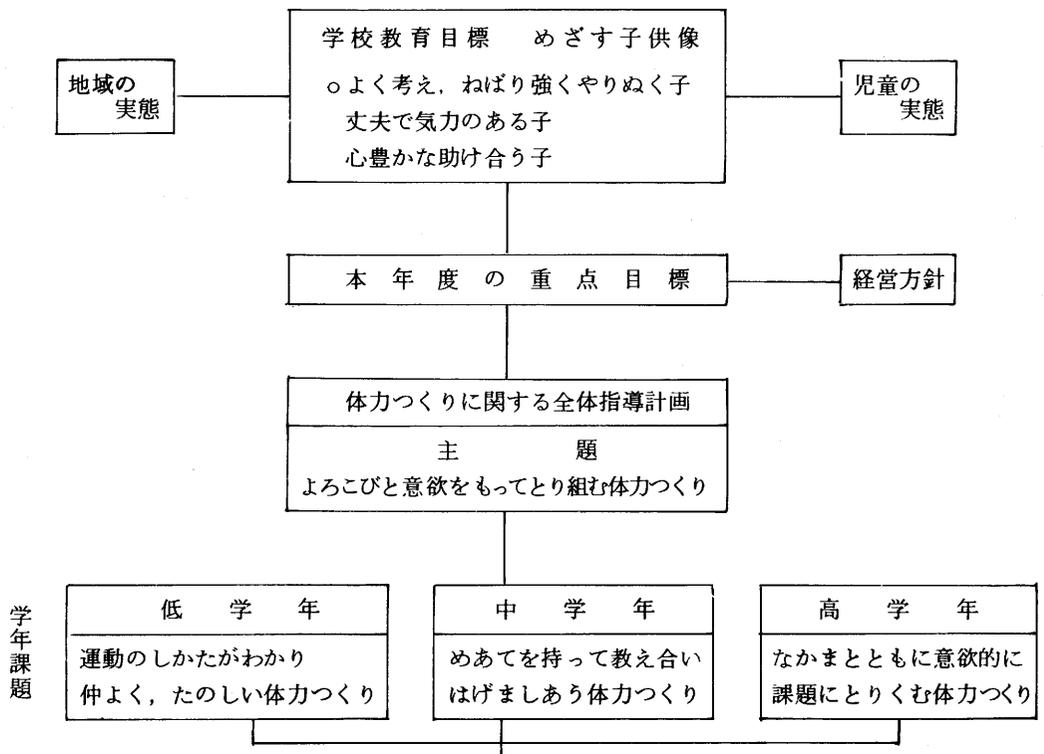
「よこ」との連携を保つための学年の共通理解の場とする。

○ 専門部会

各専門部の計画をもとに，教科体育，特活，健康安全食生活部の3部で具体的実践を行う。

教科体育部	年間指導計画の改善 授業研究，指導案検討推進 学習カード作成検討 体育の森利用推進と施設の充実
特別活動部	業間，課外運動の研究 体力カルテの作成 設備，施設の改善
保健安全食生活部	実態調査の企画，推進，調査結果の集計，分析，検討 資料の収集，提供，安全保健計画 設備，用具の安全点検

5 健康，体力づくりに関する全体計画





教科体育

目	標	重 点
低学年 ・いろいろな動きをたのしむ子どもを育てる 中学年 ・いろいろな動きができる喜びをもつ子どもを育てる 高学年 ・いろいろな動きを創る喜びをもつ子どもを育てる		<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達段階を考えた学習 ・学習のめあてのつかませ方 ・指導過程の工夫 ・基本の運動，ゲームの指導，体操の指導 ・評価のあり方， 特活との関連



特別活動

低	中	高
みんなといっしょになかよく活動する 児童会を中心とするスポーツ大会 業間体育 体育的行事 布勢小タイム 教科体育との関連	かかりを分担し力を合わせて活動する 児童会を中心とするスポーツ大会 業間体育 体育的行事 布勢小タイム 特設クラブ活動 教科体育との関連	みんなのために自分から進んで活動する 児童会を中心とするスポーツ大会 業間体育 体育的行事 布勢小タイム 特設クラブ活動 教科体育との関連



課外体育

低	中	高
みんなと仲よく遊ぶ ○体力づくりの課題 サーキットコース 早朝運動 体育の森 ○自由遊び集団 自由遊び ○スポーツ少年団 剣道 ホッケー	いろいろな遊びを工夫する めあてをもって根気よく遊ぶ 助けあい，はげましあって遊ぶ ○体力づくりの課題 サーキットコース 早朝運動 体育の森 ○体育学習練習 学習カードの利用 体力カルテの利用 ○運動練習 陸上，ボール，器械，水泳 ホッケー 自由遊び集団 自由遊び ○スポーツ少年団 剣道	いろいろな遊びを工夫する めあてをもって根気よく遊ぶ 助けあい，はげましあって遊ぶ ○体力づくりの課題 サーキットコース 早朝運動 体育の森 ○体育学習練習 学習カードの利用 体力カルテの利用 ○運動練習 陸上，ボール，器械，水泳 ホッケー ○自由遊び集団 自由遊び ○スポーツ少年団 剣道



保健安全食生活

保 健	安 全	食 生 活
保健習慣の形成 保健的行事へのとり組み方 環境づくり 委員会活動の活発化	安全行動の習慣化 安全的行事への積極的参加 環境づくり	偏食是正

6 体力づくりの実践

(1) 教科体育の充実

「よろこびと意欲を育てる体育学習」

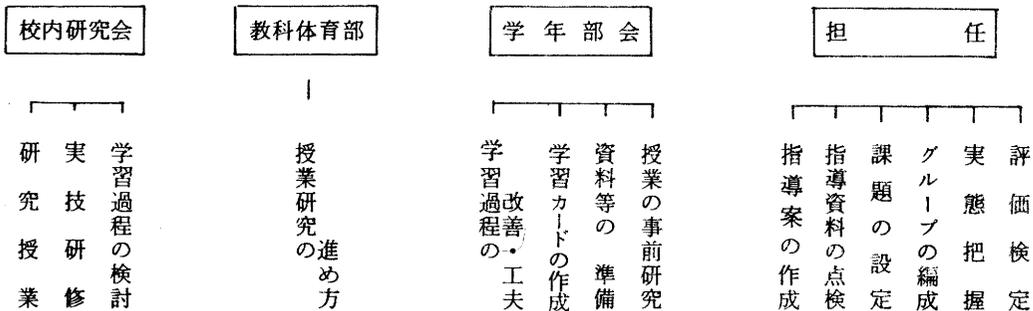
体育科指導法の研究を始める以前（昭和50年）の体育指導は技能中心とした傾向にあり、授業のパターンも教師先導型で運動を子どもに与えることが多く、やらされる体育であったため、調査などによれば、運動は好きだが体育は嫌い、といった子どももあり本当の意味で児童自身に運動の楽しさ、喜びを味わわせるという点でうすかったように思われる。

そのような反省に立って、本校では昭和50年度より上述のテーマを設定して、今までの技能中心の体育から、子どもの側に立った体育の質的転換を図り、指導方法の探究や教材づくりを通して「喜び」「意欲化」「習慣化」への実践検証を進めてきた。また、今回の学習指導要領の改訂にともない、その趣旨を検討してみると「運動に親しませる」とか「運動を楽しくできるようにする」ことが強調されており、本校の研究に合致するものであり、意を強くし、更に体育科の目標及び学校経営方針を踏まえ、本校体育科でめざす子どもの姿を前述のようにとらえて体育学習指導に望んでいる。

ア 研究内容

- (1) 教材研究の徹底による教材づくり
- (2) 喜びと意欲を育てる学習過程のくふう
- (3) 個の能力、適性を生かした指導法
- (4) 学習資料、教育機器の効果的な活用

イ 運営計画と組織



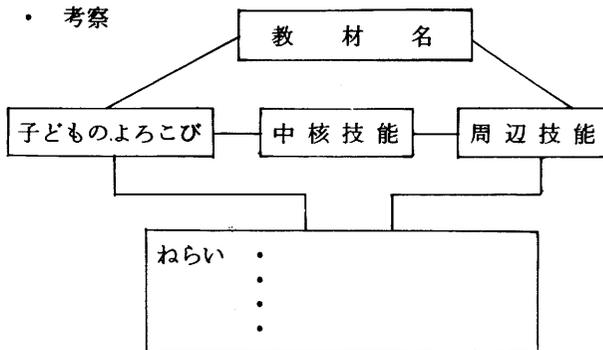
ウ 実践

(1) 教材づくり

子どもたちが進んで学習に取り組み、学習の内容を創造していく、豊かな楽しい学習するために子どものための教材でなければならない。そのためには子どもの側と教師の側の両面から教材をみつめることにした。与えられた教材を伝承するだけのものでなく、運動を分解し、どんな形で再構成すれば、子どもたちが興味、関心を持ち、子どもたちの力がほりおこされるのかをさぐることにした。

- 子どもから見た教材の特性
- 教材の分析・系統

- 子どもの実態
- 教材の組み立て
- 考察



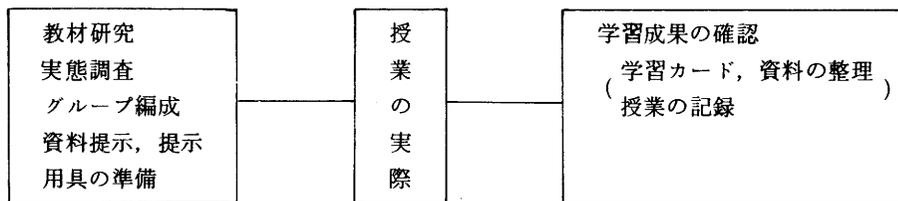
教材の系統

1年	2年	3年	4年	5年	6年

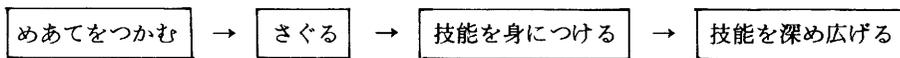
考察		段指 階導	運動 の特性
		予 想 さ れ る	
		内 容 指 導	
		留 意 点	

(イ) 学習指導過程

私たちは「学習の主体は子どもである」という前提に立ち、子供自らが思考し、創造し、発見し、課題で解決していくよろこびと意欲を持たせる学習過程を次のようにとらえた。なお、授業の事前研究と事後指導に力を入れている。

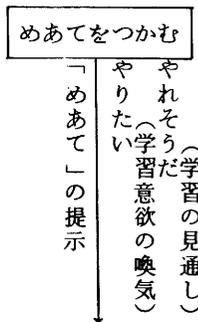


<学習指導過程>



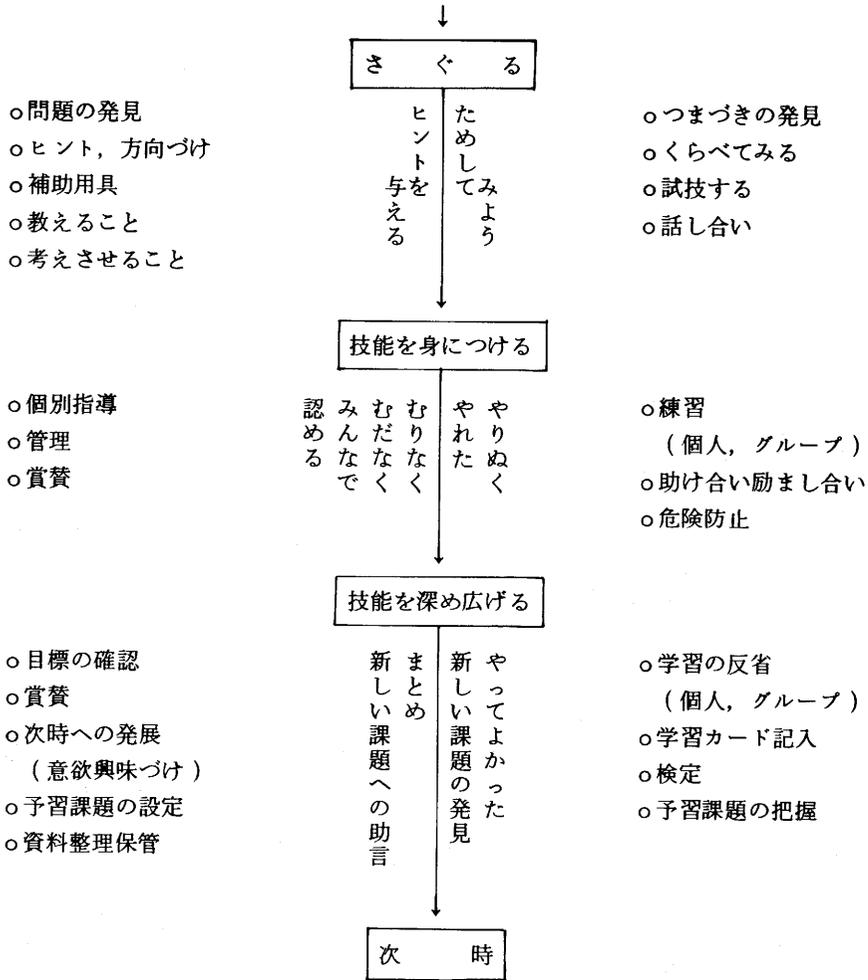
<教師の活動>

- 教材研究 (教材づくり)
- 実態調査
- 指導目標
- 指導方法
- 指導計画
- グループ構成
- 資料の準備



<子供の活動>

- 運動内容を知る
- 個人目標
- グループ目標
- グループの話し合い
- 用具の準備
- 練習方法
- カード記入



(ウ) 学習効果を高める方法

⑦ 学習カード

子どもたちが学習課題をもち主体的、自主的に学習に取り組み、運動技能の習得と能率的な学習を進めていくために、私たちはさまざまな指導の手だてを工夫してきた。体育(学習)カードもその一つであり自己の学習の成果を知り、また学習内容を理解させるため、次のような点に留意して作成している。

- 学習のねらいが明確につかむことができるカード
- 次の学習がわかるカード
- 学習のあしあとがわかるカード
- 喜んで書ける楽しいカード

低学年ではできた日には自分で絵をそう入したり、色を塗ったりさせながら、できたことへの喜びを味わわせ、更に意欲を高めていくようなカードづくりをしている。

腕立て閉脚とび (1)		6年 なまえ	
級	練習すること	気をつけること	○印
1	○ひざを胸につけるように引き上げ、うで立てとび上がり、とびおりがはやくできる (横50~60cm)	両手でとび箱を強く押し放してとぶ 	
2	○ふみ切りから、はやくひざを胸に引きつけ、安定した姿勢でとびこすことができる (横50~60cm)	踏み切ったらすばやくひざを胸にひきつける 	
3	○ふみ切ったら、はやく両手でとび箱をつきはなし安定した姿勢でとび越すことができる (横60~70cm)	手をはやくつきうしろ下にひくようにする トーン トーン 	
4	○低いふみ切りから腕のつきはなしを強くはやくして、上体を起こした姿勢で遠く(100cm)へ着地することができる (横70~80cm)	視線 遠くへ 	
5	○低いふみ切りから腕のつきはなしを強くはやくして、上体を起こした姿勢で遠く(120cm)へ着地することができる (横70~80cm)	助走のスピードを いかして 	

④ 体力カルテ (体力づくりノート)

子どもたちが自分の健康状態や、体力、運動能力の実態を知り、進んで健康、体力づくりに励むために体力カルテを作成し活用している。この体力カルテは教科体育の発展としても役立てている。

体力カルテの主な内容

- ・スポーツテスト
- ・とぶ力(幅とび、垂直とび)
- ・体力診断テスト
- ・うでの力
- ・体格、体力(平田式)
- ・マラソンの記録
- ・調整力テスト
- ・朝の運動の記録
- ・やわらかさ
- ・水泳の記録
- ・正確さ(ける力)
- ・なわとびの記録
- ・〃(投げる力)
- ・保健関係記録 など

朝の運動

□月



★自分のめあてを持って走ったりとんだりしましょう。(3周以上)

- ※雨がふった日はなわとびをしましょう。(2重とび30回以上)
- ※お休みの日は休を書きましょう。
- ※走らなかった日は○を書きましょう。



	日	月	火	水	木	金	土	合計
1周								
2周								
3周								
4周								
5周								
合計								

☆走ったりとんだ回数合計して鳥取まで走りぬこう。

★★垂直とび

どれだけジャンプができるかな?



動かすことのできたジャンプ板の所へ○の印を書き入れましょう

級	1	2	3	4	5	合計
1級						
2級						
3級						
4級						
5級						
合計						

(2) 教科外の体育

本校では、体育活動の生活化を図る手だてとして、業間体育の工夫、布勢小タイム(体育的集会)、体力カルテの活用など体育的な行事や体育施設の充実等を行ってきた。

ア 業間体育

内容

年間を夏期(4月~11月)と冬季(12月~3月)、雨天時に分け下記の運動をする。

(夏季) 1週間の各学年の運動

	月	火	水	木	金
1	⊗		学	力試し	
2	力試し	ダ	⊗	学	動
3	学	シ	力試し	⊗	労
4	学		力試し	⊗	活
5	力試し	ス	⊗	学	動
6	⊗		学	力試し	

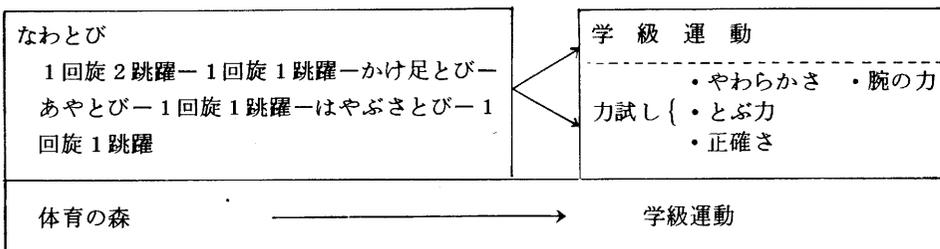
⊗ 体育の森
 学 学級運動 (月毎に変える)
 力試し

(冬季)

なわとび運動 1回旋 2跳躍 1回旋 1跳躍 かけ足 あやとび 1回旋 1跳躍 はやぶさとび 1回旋 1跳躍

(全校)

その場かけ足 前後左右とび ポートこぎ 腕立伏臥腕屈伸 体前屈 上体おこし 体側 捻転 倒立 1回転とび 腕の側開 深呼吸
--



イ 体育的行事

体育的行事には、一般的には運動会、健康診断、水泳教室、球技大会、持久走大会、各種記録会、スポーツテスト等がある。

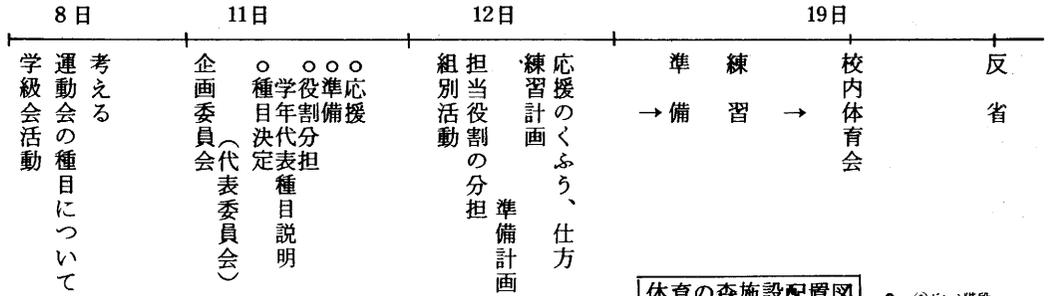
本校の場合は、それらの校内行事の一部を布勢小タイム (自由裁量の時間) に組み、児童会が主体となって行うことにより、自主性及び上級生のリーダーシップ、下級生のフォローシップを養い体育の日常化を図っている。

特に、なわとびは、いつ、どこでも、一人でも出来古くから親しまれており基礎体力を養う運動として価値の高いものであるため、本校では校技と定め20種目のわざを選定し、得点により40級の段階をつくり、進級カードにより随時検定を行い意欲化を図っている。

布勢小タイム

集会名	目的	方法	児童の係
マラソン大会	早朝マラソン、地域の走ろう会などで日頃親しんでいるマラソンの成果を知り、自己の体力に合わせてがんばる。	トラック1周125mを学年別に分けて実施する。時間走 低学年、中学年、高学年	スターター記録 用具 (距離板)
校内体育会	体育学習の成果を発表し、体育学習の生活化をねらう。	4組対抗 団体種目 障害走、ボールを使った種目、リレー、フォークダンス、網引き、	児童会で企画準備、運営する。

校内体育会実施計画



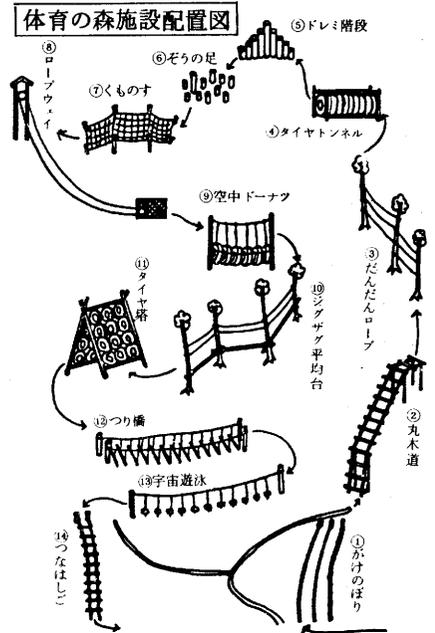
ウ 「体育の森」の利用

「子どもを自然に近い姿の中できたえる」という発想をもとに山あいを利用した、右図のような本校独特な体力づくりの施設、コースをP T Aの連日の奉仕作業により完成し、教科体育、業間体育、課外運動、学級運動等に活用し、体力を培い、気力の充実を図り、体育の生活化を図っている。

体育の森の特徴としては、

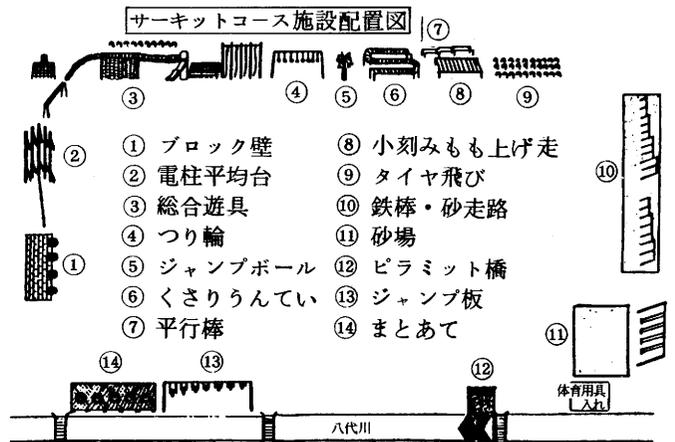
- ㉗ 自然を生かし利用した施設である。
- ㉘ 総合的な動きづくりをねらう施設である。
- ㉙ 子どもの喜ぶ施設である。

体育の森まで校門から450m、コース延長320m、体育の森に足を運ぶだけでも立派な体力づくりになっている。



エ 校庭の施設

本年度8月、子どもたちの学校生活に魅力のあるものを、心身の発達に効果的であるものを、運動がとぎれないで継続してできるものと教師、父母、子どもの3者のアイデアを集め、資材の獲得、経費の捻出、制作と積極的なP T Aの協力によって完成したのが本校自慢のサーキットコースである。



7 おわりに

50年度より体育科を中核にした研究、実践により、運動や遊びに積極的に取り組む子どもが増加し年

歌を追って確かに体力が向上してきている。保護者、地域住民の関心も非常に高まり、施設設備への協力、早朝運動、家族運動……等に現われてきており体育の生活化へ大きく前進している。しかし、本校テーマの基盤となるものは、共に体育の楽しさを知り、運動好きになることであるので、それについての研究を更に深め、子どもの自主的活動の場を質と量の面からいっそう強化したい。

Ⅱ 質疑応答

(質問) 大阪府 小坂

グループの課題と個人の課題について

グループの課題は、教師が与えるのか、グループで話し合って決めるのか。

(答え) 発表者

教師と子どもと話し合い、学習計画を立てる段階で決める。マナーの面も、グループの目標になる。

(質問) 神奈川県 森

布勢小学校の場合、素晴らしい環境にもかかわらず、施設を作らないと子どもが遊んでくれないのはなぜか。そこに木があるのに、なぜ使わないのか。

生板小学校の場合、スポーツ少年団のような組織を作らないと、子どもが遊んでくれない。おとながかかわりあわないと遊んでくれない。なぜそうってしまったのか。

(答え) 発表者

子どもの生活の中に、テレビが入りこんでいる。一家族の人数が2～4人で、子どもの数が減っている。がき大将が少なくなった。ために、学校やその回りの施設を使うように努力している。

(布勢小)

スポーツ少年団がなくても遊べるが、しっかりした指導者をつけたほうが、じょうずに遊べる。用具・経費の問題があるので、おとながみてやらなくてはならない。(生板小)

(質問) 宮城県 斉藤

体力づくりの考え方について

業間やゆとりの時間は、自由に遊び、自由にすることの確保が必要。決められた時間だと、決められた遊びしかできない。広い校庭でも、隅の方で遊んでいる。体力づくりは、施設や場所なのか、汗なのか。

Ⅲ 指導・講評

筑波大学教授 大木 昭一郎

学校とPTAの関係でできあがっている力は、良しとすべきであり、環境も素晴らしいが、それにも増

して、教師の熱意に敬意を表したい。

大事なのは、たの施設を使って、子どもがどのように変容したのかをがっちりおさえることで、仮説を立て、こうやったからこうなったとまとめれば、さらによい発表になった。サーキットをどのように使わせているのか、— 計画的に指導するのか、子どもの自由に任せるのかも聞きたかった。

P T Aが学校に近くなったというのも、研究の成果の1つであったろう。

全体的に、発表したいことが多いため、主張がぐらつき薄れてしまった。しかし、今回のような発表の形は、参加者自らが発表者になり、大事なことである。

運動の楽しさについて

運動の必要性は、たびたび聞かされたが、必要性を説いただけでは、運動の実践につながらない。何を理解させ、何を体得させたら、運動を継続する力になるのか。

やはり、運動自体を楽しむ、運動によって楽しい時間を過ごすことがこれからは必要で、余暇(自由時間)を自らの意志によって楽しむことへの対策は、国家にとって大事なことである。

運動によって楽しい人生のひとつを過ごす、そのことによって、健康が獲得できる、仲間との付き合いができる、そういうことが生き甲斐のある人生に結びついていくことを大事にしたい。

運動の楽しさを、学習指導段階でおさえると、2つに分けて考えられる。

① 力いっぱいする楽しさ(生物的要求)

② 課題を解決する楽しさ(個人としてできた喜び、集団の目標の達成)

基本の運動には、新しい動きをくふうできる喜び、ゲームには、ルールを変えることの楽しさや、仲間と協力し合う楽しさがある。

本大会は、「よい態度・習慣を身につける」が主題であったが、これに迫る中味はじゅうぶんでなかった。

「落ちつきがない」「よく見学する」これらも態度の一部ではあるが、これだけが態度ではない。

「協力して動きをくふうするとともに、表わそうとする感じがわかるようにする」(表現)「安全に運動する」そういうものをきちんととらえて指導を展開し、そのための評価があるということではなくてはならない。

「勝敗に対して正しい態度がとれるようにする」(5年 陸上運動)

それには、どういう場を与えなくてはならないか。勝敗をさせる場がなくてはならない。勝敗をさせない陸上運動では、こういう態度は、どこからも養わせる場が得られない。

態度の中味についても、具体的な学習場面を用いて、そこへ飛び込ませる。「最後までがんばる」がどういうことなのかと言えば、「負けても全力が出せたと満足できる」「勝った相手をほめることができる」「今度は勝とうと努力する」などが、態度の大事な学習の中味である。

体力づくりについて

ゆとりの時間は、教科の時間ではない。活用のしかたは、その学校、学校で創意くふうして決めることであり、体力づくりに当てようと思えば、当然当てられるものである。初等教育局調査によると、83

%の学校が体力づくりに活用している。

小学生にとって、体力づくりとは何か。

① 今の子どもの体力をどうするか。

② 将来に向かって、子どもたちが体力づくりにいそしめるには、どうしたらよいか。

この二面性をもっているなので、使い分けてほしい。

体育の授業に取り組む教師と子どもの姿勢は、今のままでよいのか。体育にトレーニングはあるのか。

予習・復習のある体育の授業を確立しなければならない。課題をしっかり設定し、それを明確化していくと、子どもは確実に挑戦していくことを、実例で知っている。

持久走について

小学校の持久走とは、長距離走ではない。体操領域に当てがったのは、この時期の子どもに対して、まだ、全力で処理して記録を高めるとか、競争させるという形で取り扱わないほうが好ましいだろうという考えからである。現場においては、子どもの競争をあおるようで持久走をさせることについては、慎重な態度をとることが肝要である。

世界の運動生理学者の定説によると、持久走は5～7分、せいぜい10分である。そして、それは競争をさせないという条件をつけることが望ましいという結論を出した。

日本の体育学会でも、ジョギングについて論じられたが、心拍数でいうと、50～60%の高まりがあれば、持久走が伸びると言われた。隣の人と話しながら走れるスピードであり、息を荒げて走る状態ではない。子どもに、「あまりがんばらなくていいよ」と言って走らせても、全力に対して90%ぐらいのスピードを出すそうである。

研究主題 「体育活動のすべての面で 自主的・意欲的にとりくむ生徒の育成」

— 望ましい態度・習慣の育成をめざして —

福島県会津若松市立第四中学校 加藤 昭一

I 発表

1. 研究のねらい

「生徒ひとりひとりが自己の体力を自覚し、体育活動の必要性を認識させ、実践を通して、いつでも、どこでも、ひとりでもできる体育活動を新しい生活習慣として定着させたい。」

この目標達成のために、各年度別の実践主題を設け、計画的・組織的に実践の見とおしを立て、特に、研究の方向として、

- (1) 生徒ひとりひとりの体力の向上と、望ましい態度・習慣の育成のために、自主的、意欲的に活動できるもの。
- (2) 改訂学習指導要領における、「ゆとりと充実」の教育活動の時間に適用できるもの。
- (3) 体育活動で身につけた、技能・態度・習慣が日常生活でも生かされるもの。
- (4) 他の中学校にも参考になるもの。
- (5) 生涯体育の方向性のあるもの。

以上5項目を研究の柱とした。

2. 研究の方法

(1) 研究の基本方針

- ① 研究の趣旨と、本校の実態および地域の特性をおさえて研究する。
- ② 全職員の共通理解のもとに研究する。
- ③ 常に生徒の実態をふまえて、指導計画を立て実践する。
- ④ 家庭および地域社会との関連をはかり効率的な研究をすすめる。
- ⑤ 常にたしかめ、フィードバックしながら、一歩ずつ地道な研究を積みあげていく。

(2) 研究方法

- ① 研究の基本方針にのっとり、計画—実践—評価をくりかえし、つねに原点にかえって見さだめるようにする。
- ② 諸調査、検査、観察によって、問題要因を的確にとらえ、実践構想をたてるとともに、ひとりひとりの生徒の変容をは握しながら研究が進められるようにする。
- ③ 研究の領域は、全教育活動の中での体育活動であるため、研究内容は、それぞれの領域、分野別に集約し、全職員が共通・共動理解するという前提にたって、役割を分担して研究をすすめる

3 研究内容

(1) 年度別主題設定

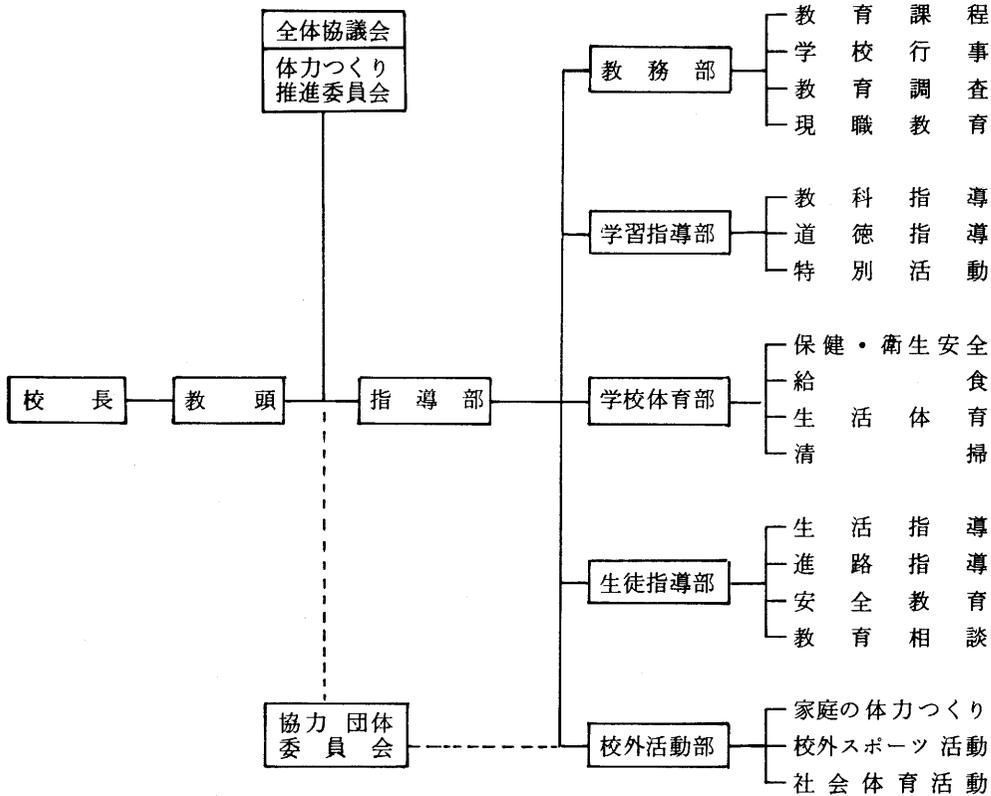
昭和51年度 「体育活動の研究体制の確立と各種の教育研究指導計画の立案実践」

昭和52年度 「全教育活動の中で、体育活動の実践を通して、生活化・個別化を図るにはどうあるべきか。」

昭和53年度 「生徒ひとりひとりが、自らの身体を自分で鍛え、自ら管理する能力を全教育活動の中で育成し、体育活動が日常・活の中に新しい生活習慣として定着させたい。」

昭和54年度 「体育活動のすべての面で自主的・意欲的にとりくむ生徒の育成」

(2) 校内組織の確立と指導体制の樹立



(3) 校内時程表

特設時間を設けて体育活動を実践するには、日課時程表にどのように位置づけるかが問題となる。○正規の時間内で実践するには無理があり、生徒が最も好む部活動の時間が裂かれるため意欲的な活動がみられず仕方なしにやるという状態であった。それらの反省の結果、2年次から常例外にし余剰の時間内で実践できる時程表をつくり、54年度は、正規の時間に戻し、「ゆとりの時間」を活用した。

時 程	曜 日	月	火	水	木	金	土
7:30～8:00			早 朝 マラソン				早 朝 マラソン
8:15～8:25		全校集会	職員打合	朝の部活		職員打合	朝の部活
8:25～9:10		1 校 時					
9:20～10:05		2 校 時					
10:15～10:25		疲労回復体操 目の体操					
10:25～10:10		3 校 時					
11:20～12:05		4 校 時					
12:05～13:05		昼 食					
13:05～13:50		5 校 時					
14:00～14:45		6 校 時					
14:45～15:25		準備, 清掃, 学活,					
15:25～15:30		目 の 体 操					
15:30～15:35		望 遠 訓 練					
15:35～16:05		全校体操	特別活動	全校体育	全校体育	生徒活動 特別活動	
16:05～17:00		ク ラ ブ 活 動					

※太字は特設時間。さらにB, C時程表が定めてある。

(4) 教科体育の充実

① 教科体育には二つの役割がある。

ア からだづくりの基本的なことを学習(身体的発達がねらい)

イ 自由時間の中で打ちこんでできる運動の基礎をつくる(生徒の余暇生活の充実と習慣化, 体育の生活化)

② 教科体育で指導した内容を自由時に行なわせる習慣をどうしてつくるか。

ア 自分の体は自分で守るという習慣をつける。(健康観察, 自己の体力を知る, 食生活と体養)

イ 体力づくりの必要性を理解する。(現代の小・中学生の体力の現状から)

ウ スポーツテスト等の結果から自分の体力の現状は握。(スポーツテスト個人表)

エ 自分の劣る種目の是正運動を自由時間にさせる。(昼休み, 放課後, 家庭, 自由あそび)

オ 生徒が活動できるような施設・用具の準備

カ ひとりでも, いつでも, どこでもできる運動をセット化する。

キ 校内の体育的行事を契機に生徒の体育に親しむ習慣を大切にする。

ク 特別活動における活動の推進

ケ それぞれの学年別の到達目標を設定する。

コ 安全に活動できる場の設定と課題意識をもたせ自由に活動できるようにする。

この二つの役割から、内在している全面的に発達するための基礎作業を行うための教科体育であるといわれる。教科体育において体育活動の基盤をつくり、それらが他の生活全般に発揮されれば、生徒個々の内在する力を最大限に伸長されることになる。従って、体育活動全般の中核であるゆえんである。

③ 創意工夫による授業の展開

ア 教師・生徒の授業へののぞみ方

＜教師の立場から＞

年間指導計画によって、この単位時間で何をどのように高めるか、技能の向上、体力の向上はどの位までのばすか、種目の領域別、内容をどう指導するか、明確なねらいをは握し授業に望む必要がある。

＜生徒の立場から＞

生徒が計画に参加し、教師の指導によってねらいを理解させ、与えられた課題に向って、自主的・意欲的な活動をする手だてを考えさせるとともに、運動の特性を正しくとらえさせる。健康観察（学級で実施）によって自己の心身の状況をとらえさせる。

イ 授業の中で生徒をどう活動させるか

1 単位時間に何を学ぶか、ねらいに基いて活動させる方法、一斉授業のとらえ方とグループ授業のとりくみ方、技能の向上（質）と体力の向上（量）をはかる。

ウ 保健・安全に対する態度

始業前の安全確認（教師の指導でグループの話し合い） コート・施設・用具の点検・健康状況・活動中の安全・自分の能力を知る（体力・技能） 活動中の約束やきまりを守る。

エ 運動の特性とねらいの関連

⑦ 運動の特性を理解させ、ねらいが学習活動の中で生かされ、意欲的な活動が展開されるようにする。

⑧ ねらいを焦点化して、集団・個人それぞれ活動しやすいように導き出す。

⑨ 基礎的・基本的な内容を理解させ、既習内容と組み合わせながら教材の特性を生かし、授業を展開する。

カ 集合・整列・あいさつ

＜集団行動を高めるために＞

⑦ すばやく集合したり、敏速な行動ができることは、非常事態に安全に避難するということにつながる。そのような行動については、教科体育で適切に指導しておく必要がある。

⑧ 基本の行動様式は一斉指導で、練習はグループで多くの生徒にリーダーの機会を与える。

⑨ 集団行動が的確に行なわれるよう身につけ、他領域の中に反映させる。

＜活動内容＞

⑦ 集合 前時終了後6分で集合させる。

⑧ 整列 各グループごと グループ長の指導

- ㊦ あいさつ 全体のリーダー 「休め」 「気をつけ」 ○年○子○名・欠席者○名・見学者○名・用具の点検異常ありません。「お願いします」

<自主的・自発的に活動させるために>

- ㊧ 細かな役割を分担し、全員が協力し能率的にさせる。
① 用具出し入れは、各グループごとに順番をきめて用意させる。
㊨ 用具の安全は、安全係で、すべて自分たちでやれるという自信をもたせる。特に、すばやく行動できるグループは賞賛する。(全員の相互評価で)
㊩ 約束ごとは必ず守る習慣をつける。(服装、セッケン、その他係で)

カ 授業のすすめ方・受け方

<問題は握の段階>

- ㊪ 本時のねらい確認 (教師の説明、発問、ゆっくり短かく要点をつかんで説明)
① 準備運動 補助・補強運動(一斉、グループ 各領域の補強運動)
㊫ 活動中止 「吹笛1回」 集合、「吹笛2回」 すばやく行動させる。
㊬ 一斉指導とグループ指導

一斉指導は、集団を効果的に活動させる最も大切な方法で、グループ指導・活動の基本になるようにしている。一斉指導だけしていると、自主的、主体的活動が育ちにくいので必要に応じて交互に指導する。

- ㊭ グループの組み方は各領域によって、等質グループ、異質グループに分けている。グループに課題意識をもたせ、生徒相互の助け合いや、教え合いを生かして学習効果を高めるようにしている。

<実践・検討・定着の段階>

- ㊮ 健康・安全に留意しながら、グループの活動を積極的にできる場の設定する。
① 生徒ひとりひとりの技能の向上と、陸上運動唯一の集団活動のリレーについて理解し、協力し励げましあって活動できるようにする。
㊯ 授業で、「よくわからせる」ということは、意欲が高まり効率的な授業が展開できる。
㊰ 「よくわからせる」ための工夫や努力が教師の重要なポイントになる。
㊱ 「よくわからせる」ために言葉で理解させる方法と、教育機器の活用及び演示による方法がある。(本校は、CF活用)

- ㊲ 全体的理解と部分的理解の必要性 (特にハードル走を例にとると)

- 振り上げ足を伸ばす……生徒にはゴールラインよりみせる。
- 抜き足のしかた……生徒にスタートラインからみせる。
- マークのとり方……側面よりみせる。
- 手の使い方……側面からみる。
- 全体のバランス……スタートラインから、ゴールラインからみる。
- 3歩ハードリング……側面よりみせる。

全体的にフォームがまとまっている生徒だけでなく、部分的にすぐれている生徒を演示することにより、自分の欠点を矯正させる。それらが全体の意欲づくりになり、ひとりひと

りの自信にもつながってくる。

④ 授業をすすめる上で、体力・技能の劣る生徒、小学校時代より体育ぎらいで通っている生徒の配慮は最も大切である。特に、技能のおくれがちな生徒に自信をもたせるために

- どんな理由からそのようになったか（育った環境・体育経験・人間関係）、聞き出して的確な指導が必要である。
- 積極的な話し合いと、その生徒に焦点をあて勇気づけ自信をもたせる指導の工夫が必要である。
- 生徒相互間における励げまし合い、協力し合えるグループ活動も大切な指導上の配慮として重要な事である。特に、リレーを例にとると、陸上運動唯一のチーム競技であるためグループの中に走力の遅い生徒がいると、勝ち負けははっきりする教材だけに不平・不満をいう生徒がある。遅くとも精いっぱいがんばった生徒を賞賛するグループふんい気をもつよう指導することによって、真の仲間づくりができ、人間関係がよくなり、日常生活でのよい習慣となってくると思われる。
- 「できたよろこび」を味わえる授業でありたい。小さな事でもよい面をみつけ、「足がまっすぐのびている」「ここではこんなつまづきがある」ので努力してみよう、と励げまし方のヒントを与える。夢中になってぶつかっていく生徒と共に「できたよろこび」を共に味わい認めてやる姿勢が次の課題への挑戦となってあらわれてくる。

⑤ その運動のよさやおもしろさを味わわせるよう工夫する。リレーを例にとると、（各班ローテーションによる授業の展開

- 基本となる短距離の練習—協力させ方 —バトンパスの仕方—活動させ方
- 走りながらバトンパスの仕方—場のづくり方 —リレー競走—課題の与え方
- C・F観察—指導のしかた・観察の仕方

⑥ 運動量の高め方

- 各領域ごとにおいて走を中心とした全身運動をとり入れる。（30m走、50m走往復）
- 各班ローテーションのグループ授業では6分の5の身体活動は可能である。
- 指導は短時間で、ゆっくり要点を活し各グループ創造活動を生かす。
- 持久性を高める運動、筋力を高める運動、調整力を高め運動を授業の後半にとり入れる
- 個人差に応じて 進的に力をつける。

⑦ 教師の動き

- グループ活動では教師の動きが重要で常に、「いつ」「どこで」「何を」を考慮しながら意欲的な行動が必要で、生徒の反応も教師の動きによって左右される。
- 教材の特性に応じた動き
- その他（ほめ方・しかり方・示範・演示・つまづきのみつけ方と処方・見学者の扱い）

<整理と評価>

- ⑦ 心肺機能の平常化（緩走等によって平常に戻す）
- ④ 筋肉をほぐす（使用した筋肉をほぐす） 心理的な疲労をなくす（グループの話し合い）
- ⑥ 用具の整理（グループごとに、す速く後片づけをする。）

㊤ グループの話し合いによる相互評価と学習成果による教師の評価

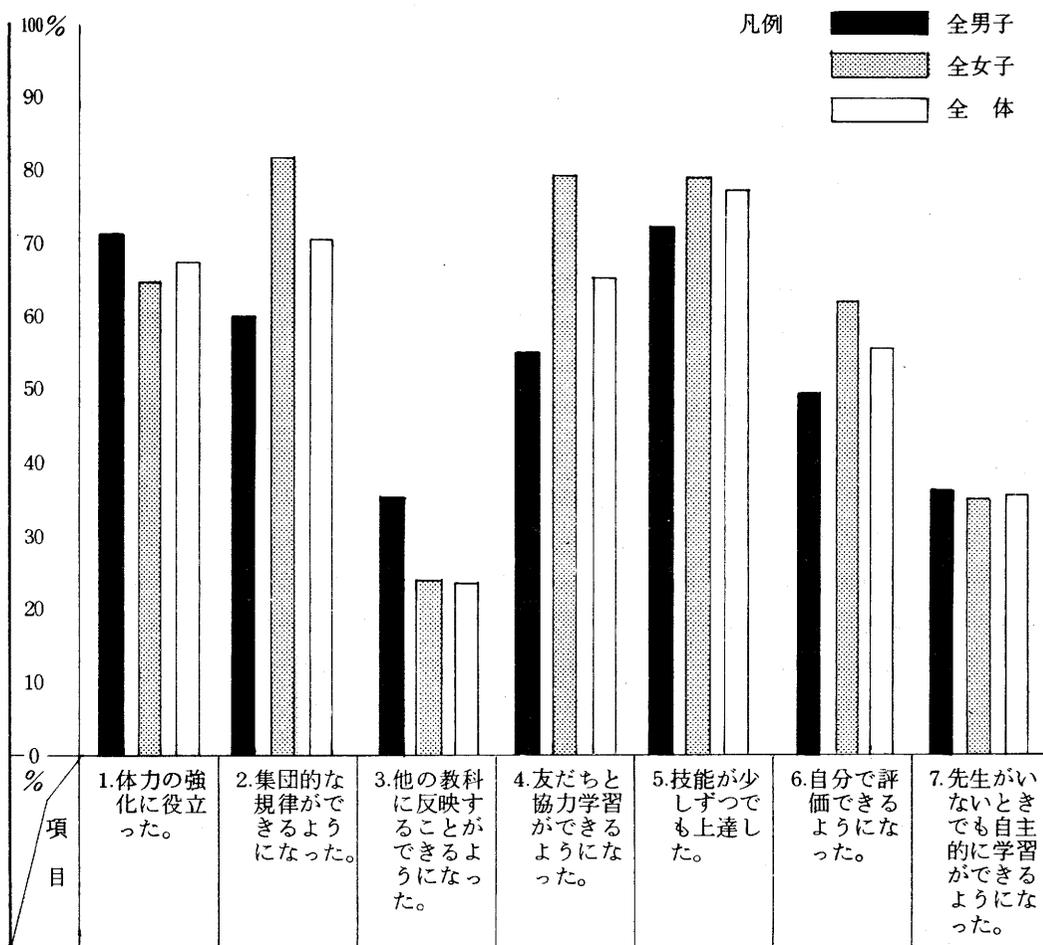
- 社会的態度の評価（態度・服装・協力・なかまづくり等具体的に）
- 技能の進歩と体力の向上（前時より早く走れた。バトンパスがよくできた等）
- グループの評価と今後の課題（お互いに協力。グループの力がついた。みんな上手になった。安全に注意した。）

<次時への予告>

本時の成果から次時への意欲づけをする。

<たしかめ>（生徒の意識の変容から）

教科体育について実践を通して自分の得たことがらについて次の項目から5つあげなさい



ともすれば、教師が諸用で授業におくれた場合とか、諸出張の為外出している場合、自発的な活動ができないのが現状であったが、この調査をする頃は、課題学習も自主的に実践し、特に、集団的な規律がよくなり、教師の出張の時も教材の指示によってリーダー中心の学習ができるようになった。また、グループ評価・個人評価・グループの協力・励げまし合い等により体育嫌いの生徒も

自信をもって学習に参加するようになり、他教科への反映もよい結果となってあらわれ、校内生活・日常生活へのよい習慣となって、生活態度も立派になってきた。

(5) 体育活動のための施設設備と工夫

体育活動を実践・生活化させていくために施設をどうするかであった。つぎのような構想のもとに討議し着手した。

- ① 現有施設を生かす。
- ② 創意工夫によって経費を最小限におさえる。
- ③ 周辺の学校でも参考にしつくれる施設を工夫する。
- ④ 校内の廃材を生かし、施設をつくる。
- ⑤ 安全性が高く、幼・小・中のすべての人達が活用できるよう工夫する。
- ⑥ 晴天時・雨天時でも活用できるよう屋外・屋内にセットする。
- ⑦ 幼児・児童・生徒に親しみ易く、いつでも・どこでも・ひとりでも活動できるようセットする。
- ⑧ 地域のスポーツ活動のために役立つよう工夫する。
- ⑨ 生徒の体力の実態にそうよう工夫する。
- ⑩ 楽しみながら、気軽に運動できる施設にする。
- ⑪ 施設づくりの作業は、職員、生徒の協同作業によって設備する。
- ⑫ 主要運動場に影響しないよう運動場周囲に設けることにした。

(6) 生活体育とそのプログラムの多様化

① 全校体操・全校体育

体育活動の一環として、全校体操・全校体育を企画し、体力の向上とともに、生徒の日常生活における習慣化を意図し、自分の体力は自分が管理するという基本的な習慣の育成を図り、ひとりひとりが生活の中に定着させ、生涯体育の基盤づくりとしたい。

② 疲労回復体操・目の体操・遠方凝視訓練

体力づくりは、負荷した心身の状態をいかにして早く回復させるかが学習能率をあげるために重要なことである。学習によって疲労した心身の状態を早く回復させ、つぎの学習への意欲を喚起させ、学力の向上を図る。頭とからだの使い方のバランスをとるよう学校で実践した内容を日常生活でもできるよう習慣化を図りたい。それらが生涯体育の場で生かされ、職場においても家庭においても実践できるようになれば、生活力の向上とともに、自分の健康も維持されるだろう。また、仮性近視が多くなっている生徒の現状をふまえ、仮性近視の予防と視力の現状を維持していく習慣を養うために、目の体操・遠方凝視訓練を並行して実践してきた。

③ 早朝ランニング

朝の光をいっぱいうけて、すがすがしい気持ちで軽ランニングを行い、血液の循環をよくし、学習意欲の向上と体力の向上を図った。

④ ゲームの集い

学級対抗ゲームによって、学級集団および学年におけるなかまつくりを推進し、楽しく、明るく生活できるようにし、ゲームの企画・進行も自らの手で実践させ、それらの経験を積むことによって、生涯スポーツの企画・運営等がスムーズに展開できるようになるだろう。一方、楽しさの中から、ひとり、ひとりの体力増進とスポーツの習慣化が図れるように努めてきた。

- ⑤ 同好の生徒のあつまりで、学年をはなれてお互いに協力、なかまつくりを推進し心身の発達をらながし、積極的な活動によって心身の鍛練を図る。いっぽう、それらの活動を通し対外競技に参加し、チームの和と体力の増進を図り、生涯スポーツ活動の基礎づくりになるよう実践した。

⑥ フォークダンスの集い

全校体操と隔週月曜日に実践し、男女をとわずおどりの輪の中で友情を深め、楽しいひとときをすごし、野外活動等でも実践できるよう指導している。また、青年の集い、キャンプの実践、J・R・C活動においても幅広く実践活動できるよう取り組んでいる。

⑦ サーキットトレーニング

余暇を有効に活用して体力増進にあたる習慣を身につけさせる。早朝、昼食後その他余暇に自由に活用させる。部活動の体力増強に活用している。

(7) 健康生活と体育活動(保健・安全)

体格、体力が不均整になる要因として、運動・栄養・休養がアンバランスであることがあげられる。健康な生活をするためには、ひとりひとりの生徒が、「自らの身体は自ら守る」という自覚と認識が必要で、それらを高めるため、つぎの実践活動・方法・内容で実践した。① 生活をふりかえっての実践。② 食生活の指導(個人カルテ活用)。③ 運動指導(教科体育、生活体育、個人カルテ活用)。④ 生活指導(生徒指導 プログラム 個人カルテ活用 生活をふりかえって)。⑤ 勤労指導(個人カルテ活用)。⑥ 休養指導(個人カルテ 疲労回復体操 目の体操)。⑦ 余暇指導(個人カルテと処方 社会体育への参加)。その他、疾病予防対策を校内一丸となって実践し、安全管理面でも、学校生活を中心とした事故防止の実践計画をたて、それらが日常生活に習慣化され、自ら実践できる態度育成に努めた。運動・栄養・休養の三位一体で鍛練するようにした。

(8) 特別活動と体育活動

- ① 生徒各自の心身の健康を維持増進していくようにつとめる。
- ② 話し合いの過程を重視して学級の質的向上をめざす。
- ③ 学校行事、全校体育、全校体操、クラブの集い、部活動への積極的な参加を通して、生涯体育への習慣と認識を高める。
- ④ 全校集会や集団行動を通し、自主・協同社会性を身につけさせる。

(9) 学校給食と食生活の改善

学校給食を自分たちのものとして、より正しく、楽しい給食にしようと思欲的にとりくんでいる。
○ 手の清潔 手洗いの励行、生産の理解・協力等、楽しい給食活動のムードづくりに効果をあげ「給食のきまり」を守って実行し、それらが日常生活の食改善に役立つよう啓蒙活動をしている。

(10) 長期休業中の体育活動

学校生活において、体育活動の理解と実践を深めながら体力の向上、習慣・態度の生活化をめざしているが、長期休業になると継続的な実践がとどえるために、実践前のからだに帰ってしまうのが現状であった。その反省にもとづいて長期休業中の体育活動実践表を生徒ひとりひとりにもたせ表彰制度をつくり、積極的に実践できるよう配慮した。実践の結果はよく、習慣化されてきた。

(11) 校内体育活動の自主運営と地域連携による体育活動の生活化

生徒が学校行事に積極的に参加し、日常の学習成果の総合的な発展を図る。また、集団への所属感を深め、集団行動の望ましい態度を育てるようにした。その結果から生まれる自主・自発の精神を地域の社会体育との連携のもとに活動させ、体育活動を通じた青少年健全育成をめざした。

12 体育活動の評価

教科体育を中核として、全教育活動の中で実践を深めてきたが、教科体育の積極性、スポーツテストの結果の向上（全国・県平均より上回る）。健康生活の自主管理。強靱な意志力、自律的な精神、教師・生徒・保護者との連帯感の深まり、学習の効果、集中と転換と、すべての活動が意欲的になり、高校入試も全員入学を果し、生徒指導面でも、非行化に走る生徒はなくなってきた。

4 今後の課題

生徒の日常生活の中に、すでに習慣化されつつある体育活動の成果を、より確かなものとするために継続研究をしなければならない。ともすれば、教師指導型から抜け切れないままに終わってしまう場合が多いが、「よろこんで参加する」「自ら鍛える」「自らの手で健康管理する」という自主活動型に転換するという指導の工夫を今後もすすめなければならない。生徒自らが、自主的・意欲的な活動ができれば、依頼心の強い、無気力な生徒はなくなるだろう。また、体育活動も充実し、よい態度・習慣も定着すると思われる。この研究は、小規模校在任中の研究であり、昭和55年度の定期異動で大規模校に転出したので、今後、大規模校での研究をどうするか、4年間の研究実践を生かし、大規模校の実態および生徒の特性、また地域の実情をふまえて研究をすすめていきたい。特に、現在社会問題となっている生徒の非社会的問題・反社会的問題の諸問題の研究を深め、ひとりひとりの生徒が、生活全体の中で、「集中と転換」の徹底をはかり、心身ともに明るい、知・徳・体の調和のとれた人間形成をめざし、希望に満ちた学校生活がおくれるようにしていきたい。

なお、詳細については体育活動の資料を参考にして欲しい。

II 質疑応答

（質問） 東京都江戸川区立瑞江中 伊藤先生

運動の特性を理解させるのにどのようにしているか。

（答え）

単元のはじめに全体の授業の流れを把握させ、それぞれの時間の特性をプリントを使用して理解させるようにしている。コンセプトも使用している。

（質問） 山口県下関市彦島中 真柴

- ① 正科クラブの位置づけをどのようにしているか。
- ② 校庭で行われる行進と体操の内容はどのようなものか。
- ③ 特別活動の内容は。
- ④ 目の体操はいつ行っているのか。
- ⑤ 健康生活と体育活動の内容はどのようなものか。
- ⑥ 個人カルテとはどのようなものをいうのか。また、それをどのようにして活用しているのか。

(答 え)

- ① 正科クラブと部活動を1つにして行っている。
- ② 体操は自校体操は行わず生涯体育の面からラジオ体操をとり入れた。行進については基本的なことをおさえる意味で行うのであり、校内陸上競技大会などのときを利用し指導する。
- ③ 特別活動の内容は学習指導要領にある範囲でおさえている。
- ④ 目の体操は2時限と3時限の間に、2時限の終わった場所で行って休けいに入る。
- ⑤ 家庭生活の中での体育的な活動という意味で、1日の生活の一つ一つの行動や場面を行動体力(ふとんをあげる、手伝いをするなど)と防衛体力(さわやかな目ざめ、歯をみがくなど)に分け、それぞれチェックする。
- ⑥ 個人カルテの処理は生徒のリーダーに集計処理をさせ(月末)、それを先生が資料として活用する。カルテについては現物を持ってきたのでそれを見てもらいたい。

Ⅲ 講 評

筑波大学教授 山 川 岩之助

基本的に考えなければならぬことは、何を問題にするかが大切である。これをおさえないと焦点がぼやけて、やっている活動が一般化してしまう。したがって、学校としてはまずそれをしっかりおさえて研究に入ることが必要である。問題がおさえられればそれに向けての教育活動があり、その教育活動の特徴を考えねばならない。考え方としては、教科と教科外活動があるが、この関係をどう考えるかにある。このつながりのある体育活動をどうとらえていくかである。研究をしていく場合、多方面にわたることはさけた方がよい。焦点をしっかりおさえてやる必要がある。

全体をまとめていえば、態度のような一定のことがあり、行動の背後にあるもの、行動を方向づけるものの態度を体力ということができる。

教育は手がかりなので、できるだけ具体的な態度、行動を手がかりとして社会的に認められる方向にもっていくことである。したがって、体育での体力は施設、用具に対して、あるいは個人に対して、チームに対して、技術に対しての具体的なものであるといえる。

次に、教師と生徒とのかかわり合いにおける体力は、かなり情緒的な契機によって左右される。ショックなどにより反対な方向にいくこともある、無意識的な模倣だけによることもある。先生の言っていることと異なった受けとめ方をする場合がある。生徒は先生の態度、姿勢をよく見ぬく。態度とは客観的、技術的な面をこえてもっと人間的なものである。それは学習により学ぶのである。

習慣とは、社会的に行動するときに一定にきまったパターンをとることである。これをうちやぶることによって思考態力を高めることが創造性をつけることである。体育の知識とそれにより対処のしかたがちがってくる。それによって人間的なもの、人間らしく行動があらわれてくる。そして、より進んだ習慣化がなされる。

態度は、1. 学校や先生の姿勢、2. 情緒的な雰囲気、3. 知識を身につける が作っていくが、体育はその知識を与え、人間性豊かな育成をはかる態度を育成することである。

体育による人間形成はなにかといえば、行動の知識が運動によってなされることである。したがって人間形成は体育だけでなく、各教科、領域によりなされていくのである。

研究主題 「体育学習における望ましい態度・習慣の育成」

— 体育学習における生徒の心情や挫折体験の理解を通して —

東京都高等学校保健体育研究会研究局体育部会部長 阿部 修二

1 発表

1 研究の目的

この研究は昭和50年度第14回東京大会で発表した「自主性」「積極性」の育成に関する研究を基礎にしたものである。体育学習において、望ましい態度・習慣を育成することは、保健体育科の重要な目標である。しかし、生徒の体育離れの傾向の中で、それを達成することは困難である。そこで、この体育離れ傾向に歯止めをすることが望ましい態度・習慣の育成の前提条件と考え、生徒が体育学習に対してどのような心情でいるか。また、体育学習における挫折体験や体育学習に対する生徒の願いなどを明らかにして、授業の再構築を図ることを目的とした。

2 研究の仮説

望ましい態度・習慣が十分に育たないのは、体育学習での生徒の心情理解の不足や、学習における挫折体験が授業に対する意欲を失わせていると思われる。したがって、体育学習に対する生徒の心情や挫折体験・願いなどを明らかにして、それらを授業展開に生かすことによって体育学習による意欲・習慣の育成（体育学習の陶冶性）が期待できる。

3 研究の内容・方法

(1) 研究の内容

① 調査研究 調査の内容は、下に示すとおりである。

ア. 体育学習における生徒の心情（体育に対する好き・嫌い）

イ. 体育学習における挫折体験

㉞ 情意的要因

㉠ 活動欲求の充足 ㉡ 恐怖体験 ㉢ 劣等体験 ㉣ 人間関係の葛藤

㉤ 挑戦性

㉦ 技能のできばえ要因

㉧ 種目への適性 ㉨ 運動経験 ㉩ 運動（種目）への興味・関心

② 調査結果を考慮した授業の展開 調査結果から考えられる授業を設計し、その授業を通して授業のあり方をさぐり、生徒の変化についての事後調査を行う。

(2) 研究の方法

① 調査研究 調査対象 都立高等学校7校

調査人員 1年男子222名、女子240名、2年男子238名、女子237名

3年男子204名、女子225名、計1,366名

② 授業研究 都立小山台高校1年男子177名 都立蒲田高校女子85名
 单元名 障害走 授業時間 両校共10時間

4. 調査の結果と考察

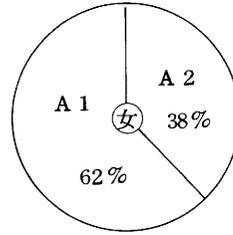
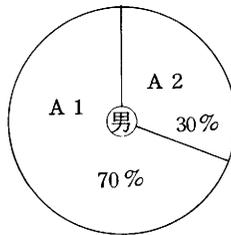
(1) A1 体育は面倒で疲れるが好き

男70% 女62%

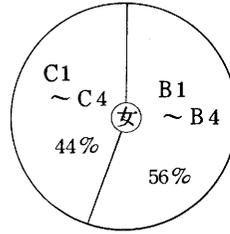
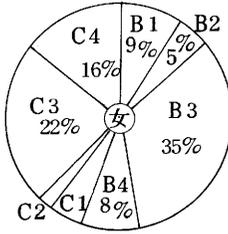
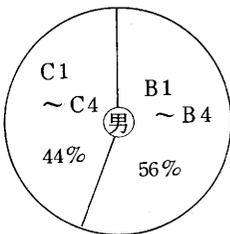
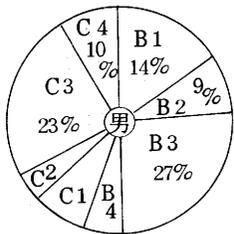
A2 体育は面倒で疲れるから嫌い

男30% 女38%

- 性差がない。体育の授業では情意的な面が強く作用している



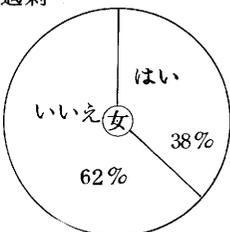
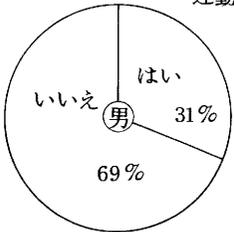
- 情意的要因 …………… B1 好きで上手 B2 嫌いだが上手
 B3 好きで下手 B4 嫌いで下手
- できばえ要因 …… C1 上手で好き C2 上手で嫌い
 C3 下手で好き C4 下手で嫌い



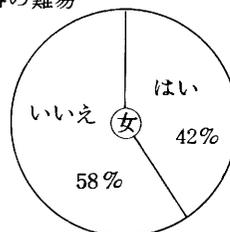
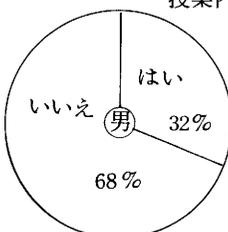
(2) 情意的要因

ア. 活動要求の充足

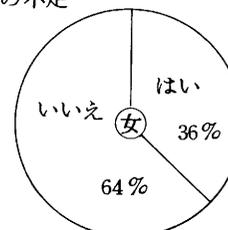
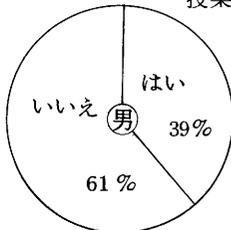
運動量過剰



授業内容の難易



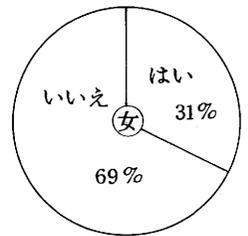
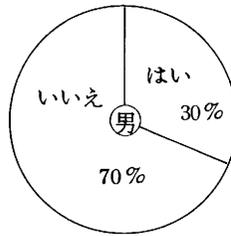
授業時間の不足



イ. 恐怖体験

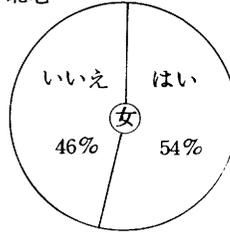
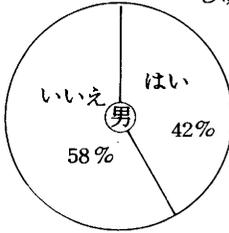
授業中の恐怖感 男30% 女31%

- 危険・不安・経験不足・怪我等による恐怖感をもっている生徒が3割いる。効率的な授業展開のために恐怖感の排除が大切である。

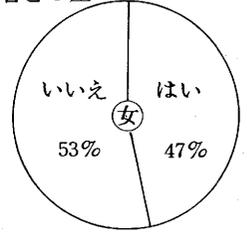
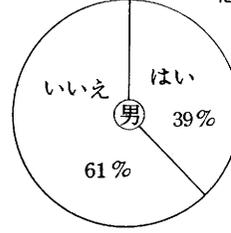


ウ. 劣等体験

しゅう恥心



他の者との差

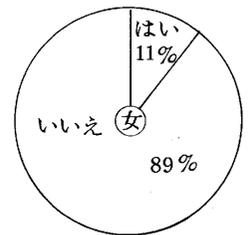
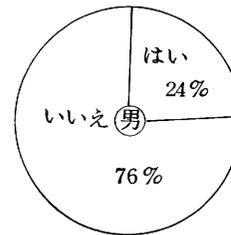


- 全体に高い中で女子が多い。恥をかかせる、他者との比較について配慮が必要である。

エ. 人間関係の葛藤

技能劣等

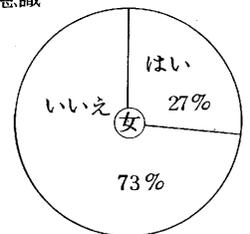
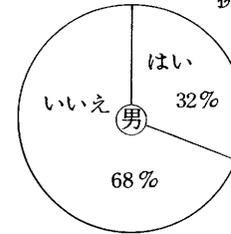
- 男子の方が多い。



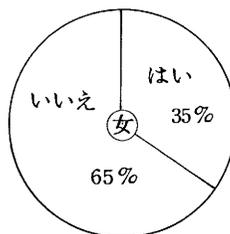
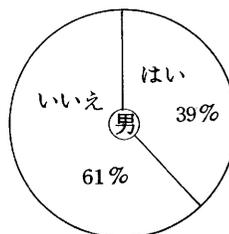
オ. 挑戦性

- 全体的に前向きな取り組みを感じる。男子の方が多い。

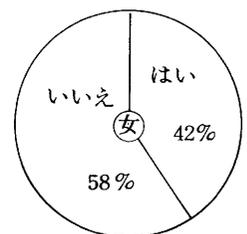
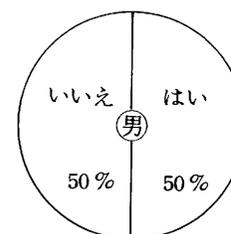
挑戦の意識



体力への挑戦



技能（記録）への挑戦



(3) 技能の出来ばえ要因

Bア 運動への適性

- ① 種目への適性 男 野球12% 卓球8% 陸上(短)7%
女 バレー14% バドミ12% テニス11%
その理由 男 瞬発力12% 敏捷性9% 闘争心9%
女 " 18% 持久力6% " 6%

● 種目に性差がある。女子はネットをはさんで行う運動に集中している。その理由ではその他(好きだから・今までやった)が最も多かった。

- ② 種目への不適 男 すもう16% 器械15% 水泳10% ダンス10%
女 陸上(短)18% 器械15% すもう11% 水泳11%
その理由 男 体格21% 柔軟性12% 恐怖感10%
女 恐怖感18% 柔軟性14% 持久力14%

● 性差は少ない。その理由の中で恐怖感と答えた生徒の指導が大切である。

Bイ 運動経験と感情

① 運動クラブの経験

- 小学校 男 野球21% ソフト17% 卓球16% サッカー14%
女 バレー18% 卓球15% バドミ13%
中学校 男 バスケット15% 卓球12% 陸上(短)11% 野球10%
女 テニス23% バレー20% バスケット15% バドミ13%
高校 男 テニス13% バスケット11% 卓球10% サッカー10%
女 テニス23% バドミ15% バレー13% バスケット13%

② 地域スポーツクラブの経験

- 小学校 男 野球52% 剣道15% 水泳13%
女 水泳40% バレー11% ソフト9%
中学校 男 野球41% 剣道14%
女 バドミ10% バレー9% バスケット9%
高校 男 野球17% テニス10% 剣道9%
女 テニス30% バスケット15% バレー11%

③ 運動に対する感情

- 男 楽しさ31% 苦しさ12% 成功感12% つらさ11%
女 " 27% チームW17% 苦しさ12% つらさ11%

Bウ 運動種目の興味や関心

① 行って好きなスポーツ

- 男 野球22% テニス9% 卓球8%
女 テニス20% バレー19% バドミ16%

- ② 見るのが好きなスポーツ
 男 野球46% すもう7% サッカー7%
 女 野球42% バレー14% テニス7%
- ③ 卒業後のスポーツ
 男 テニス18% 野球17% 卓球7%
 女 テニス37% バレー9% バドミ8%
- その理由
 男 現在やっている35% 健康が一番16% これからやりたい14%
 女 現在やっている36% これからやりたい25% 健康が一番10%
- ④ 運動種目に関する興味
 男 見る・行う56% 行う22% 見る17%
 女 " 50% 見る25% 行う17%

〈表1〉 体育の好き・嫌いと挫折体験との関係

			Aア				Aイ			Aウ		Aエ			Aオ		
			(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)
好き	N424 A ₁	男	n 144	100	114	197	120	33	75	166	152	88	68	29	158	202	244
		%	34.0	23.6	26.9	46.5	28.3	7.8	17.7	39.2	35.8	20.8	16.0	6.8	37.3	47.6	57.5
N381	女	n	112	120	151	184	107	53	121	194	172	22	20	34	117	160	188
		%	29.4	31.5	39.6	48.3	28.1	13.9	31.8	50.9	45.1	5.8	5.2	8.9	30.7	42.0	49.3
嫌い	N189 A ₂	男	n 28	98	87	33	73	28	49	97	89	60	44	29	45	61	73
		%	14.8	51.9	46.0	17.5	38.6	14.8	25.9	51.3	47.1	31.7	24.9	15.3	23.8	32.6	38.6
N206	女	n	121	120	101	25	82	37	55	139	120	31	23	41	47	61	49
		%	10.2	58.3	49.0	12.1	39.8	18.0	26.7	67.5	58.3	15.0	11.2	20.0	22.8	29.6	23.8
好きで上手	N 88 B ₁	男	n 44	23	27	53	20	7	16	16	15	14	10	6	48	54	63
		%	50.0	26.1	30.7	60.2	22.7	8.0	18.2	18.2	17.0	16.	11.	6.	54.5	61.4	71.6
N 50	女	n	20	10	14	24	2	3	10	12	11	0	0	0	16	36	36
		%	40.0	20.0	28.0	48.0	4.0	6.0	20.0	24.0	22.0	0	0	0	32.0	72.0	72.0
嫌いだ が上手	N 54 B ₂	男	n 20	18	18	13	15	7	12	21	16	8	6	6	14	25	24
		%	37.0	33.3	33.3	24.1	27.8	13.0	22.2	38.9	29.6	14.8	11.1	11.1	25.9	46.3	44.4
N 23	女	n	5	8	7	6	5	1	4	9	8	2	1	1	5	7	6
		%	21.7	34.8	30.4	26.1	21.7	4.3	17.4	39.1	34.8	8.7	4.3	4.3	21.7	30.4	26.1
好きだ が下手	N167 B ₃	男	n 45	48	50	71	54	17	51	86	73	50	36	12	51	73	80
		%	27.0	28.7	29.9	42.5	32.3	10.2	30.5	51.5	43.7	29.9	21.6	7.2	30.5	43.7	47.9
N201	女	n	50	65	77	75	71	31	69	128	107	18	16	27	54	87	92
		%	24.9	32.3	38.3	37.3	35.3	15.4	34.3	63.7	53.2	9.0	8.0	13.9	26.9	43.3	45.8
嫌いで下手	N 39 B ₄	男	n 3	23	17	4	19	9	10	17	21	17	14	9	12	12	12
		%	7.7	59.0	43.6	10.3	48.7	23.1	25.6	43.6	53.8	43.6	35.9	23.1	30.8	30.8	30.8
N 45	女	n	5	28	24	4	19	10	19	11	25	9	5	14	6	9	14
		%	11.1	62.2	53.3	8.9	42.2	22.2	42.2	68.9	55.6	20.0	11.1	33.3	13.3	20.0	31.1

			Aア				Aイ			Aウ		Aエ			Aオ		
			(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)
上手だし好き	N 35 C ₁	男	n 15	4	10	19	6	5	5	9	6	2	5	0	9	11	20
		%	42.9	11.4	28.6	54.3	17.1	14.3	14.3	25.7	17.1	5.7	14.3	0	25.7	31.4	57.1
上手だが嫌い	N 15 C ₂	女	n 8	5	7	12	1	3	2	5	6	2	0	1	7	8	8
		%	53.3	33.3	46.7	80.0	6.7	20.0	13.3	33.3	40.0	13.3	0	6.7	46.7	53.3	53.3
上手だが嫌い	N 23 C ₂	男	n 4	10	9	4	5	1	2	5	5	3	3	2	7	5	9
		%	17.4	43.4	39.1	17.4	21.7	4.3	8.7	21.7	21.7	13.0	13.0	8.7	30.4	21.7	39.1
下手でも好き	N 142 C ₃	女	n 1	3	2	1	1	1	0	1	1	0	0	0	1	2	2
		%	20.0	60.0	40.0	20.0	20.0	0	20.0	20.0	0	0	0	0	20.0	40.0	40.0
下手でも好き	N 143 C ₃	男	n 31	36	40	60	46	11	22	68	64	23	22	9	45	67	81
		%	21.8	25.4	28.2	42.3	32.4	7.7	15.5	47.9	45.1	16.2	15.5	6.3	31.7	47.2	57.0
下手で嫌い	N 62 C ₄	女	n 36	53	56	63	45	21	25	84	75	9	14	9	44	48	58
		%	25.2	37.1	39.2	44.1	31.5	14.7	17.5	58.7	52.4	6.3	9.8	6.3	30.8	33.6	40.6
下手で嫌い	N 96 C ₄	男	n 7	35	26	7	30	6	13	45	40	29	19	11	14	18	24
		%	11.3	56.5	41.9	11.3	48.4	9.7	21.0	72.6	64.5	46.8	30.6	17.7	22.6	29.0	38.7
下手で嫌い	N 96 C ₄	女	n 17	68	55	10	47	18	28	78	60	15	12	16	29	39	29
		%	17.7	70.8	57.3	10.4	49.0	18.8	29.2	81.3	62.5	15.6	12.5	16.7	30.2	40.6	30.2

(4) A₁, A₂ の結果

A₁ 体育授業での活動要求が充足され、時間不足を訴えている。

恐怖体験が少ない。

劣等体験が少ない。

人間関係の葛藤も少ない。

体力や記録への挑戦性が多い。

A₂ 体育授業での運動過剰と内容の難易が多い。

恐怖体験が多い。

劣等体験が多い。

人間関係の葛藤が多い。

体力や記録への挑戦性は少ない。

(5) B₁ ~ B₄ ・ C₁ ~ C₄ 別の結果

B₁ 体育への取り組みが前向きである。

体育の好きな生徒は、男 88%、女 90%である。

B₂ B₁ に比して劣等体験が多い。

体育が好きな生徒は半数である。

B₃ B₁ に比して恐怖体験、劣等体験、人間関係の葛藤が多い。

体育の好きな生徒は、男 87%、女 87%である。

B₄ B₁ に比して運動量の過剰、授業内容の難易、恐怖体験、劣等体験、人間関係の葛藤が多い。

体育の嫌いな生徒が、男 95%、女 98%である。

C₁ B₁ に比して性差が目立ち、女子の劣等体験が多い。
体育の好きな生徒は、男 89 %、女 60 %で女子が少ない。

C₂ 運動量過剰、授業内容の難易が多い。
体育の好きな生徒は、男 13 %、女 40 %である。

C₃ 劣等体験が多い。
体育の好きな生徒は、男 87 %、女 85 %である。

C₄ B₄ と同じ傾向を示している。
体育の嫌いな生徒は、男 90 %、女 92 %である。

- (B₂)、B₄、C₂、C₄ に体育の嫌いな生徒が多い。特に授業では、運動量の過剰、授業内容の難易、恐怖体験、劣等体験、人間関係の葛藤が多い。

(6) B₂、B₄、C₂、C₄ と Bア～Bウの結果 男 190 名 女 202 名

Bア 適性のない種目

男 器械26 長距離21 すもう12

女 陸上(走)30 器械20 バレー11

その理由

男 体格21 持久力16 敏捷性11

女 恐怖感37 柔軟性22 持久力19 体格11

Bイ 課外クラブ

- 全般に少ない。

学校外のスポーツ

- 全般に少ない。

感情

男 楽しさ36 つらさ27 苦しさ22 成功感5

女 楽しさ38 苦しさ31 楽しさ20 チームW10

- B₂ と C₂ は楽しさがトップ、B₄ と C₄ は苦しさ、つらさがトップ。

Bウ 運動種目の興味や関心

行うスポーツ

男 野球33 サッカー15 テニス9

女 テニス28 バドミ28 バレー10

見るスポーツ

男 野球81 サッカー9 バレー5

女 野球50 バレー16 ハンド7

卒業後のスポーツ

男 テニス19 野球13 卓球8 長距離5 スキー5

女 " 41 スキー4 ダンス4

運動種目に対する興味

男 見る・行う57 見る53 行う34 嫌い9
 女 見る95 見る・行う40 行う17 " 3

	見る・行う	見る	行 う
全体・男	55.6 %	16.5 %	21.7 %
男	30.0	27.9	17.9
全体・女	50.4	25.4	16.5
女	19.8	47.0	8.4

・ B₄ と C₄ は見るのがトップ。B₂ と C₂ は見る・行うのも好きがトップ。

情意要因(好き⊕, 嫌い⊖)・出来ばえ要因(上手⊕, 下手⊖)で⊕と⊕, ⊕と⊖, ⊖と⊕の場合は⊕の面があるので, 何とか指導の効果は期待できると思われる。しかし, ⊖と⊖の場合(B₄ と C₄)は, 指導がなかなか困難である。その合計は, 男子107名(16.1%)・女子163名(23.2%)でありこの2割近い生徒の問題点を指摘し, その改善点を考えることが, 体育の授業において望ましい態度・習慣の育成につながるとと思われる。

そこで表1より, 体育が嫌いになる原因のうち, 主なものを5つ選び出してみた。

- 第1位 「皆ができるのに自分だけできなかったために, はずかしい思いをした」
- 第2位 「できないことによって, 他の者と差をつけられていやな思いをした」
- 第3位 「運動量が多すぎて, 活動するのがいやになった。」
- 第4位 「授業内容がやさしすぎたり, むずかしすぎて活動したいという気持ちがなくなった」
- 第5位 「授業中に怖い気持を感じた」

この5原因をできるだけ体験させないような授業を行って, 意識調査の結果を実証することにした。

5. 授業研究 陸上競技 — 障害走

(1) ねらい

体育が嫌いになる要因をできる限りとりのぞいた授業を行い, 自ら興味・関心をもって体育に取り組む態度・習慣を養う。

(2) 方法

- ① 技能レベルの同じ生徒を2人組とし, 相互学習を探る。
- ② 2人組をいくつか集めた班をつくり, 班内の相互学習を探る。
- ③ ハードルのインターバルを能力別に工夫する。
- ④ 班対抗のリレー形式をとりいれ, 興味・関心をもたせる。

(3) 期間

昭和55年11月4日(火)～昭和55年11月25日(火)

(4) 対象

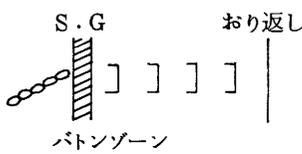
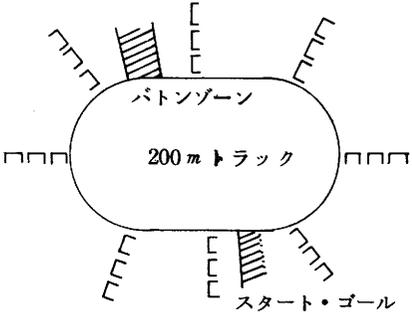
都立小山台高校 1年男子 177名 都立蒲田高校 2年女子 85名

(5) 単元計画

学 習 内 容	
1	<ul style="list-style-type: none"> ● オリエンテーション 過去の体験からくる挫折・恐怖感を除くための指導。楽しく協力して実施させるための例を説明。はずかしさを忘れるための指導。 ● ハードリングのフォームテスト ⇔ 2人組, 班づくり
2	<ul style="list-style-type: none"> ● 2人組による振り上げ脚と抜き脚の練習。 ● 軽走でのハードリング(インターバル6m) ● ハードルくぐりのリレー (以後, ハードルの高さは76cm)
3 4 5 6	<ul style="list-style-type: none"> ● 軽走でのハードリング(2人組) 相互評価, 個別指導 ● インターバル走(3歩) 3種類(7m, 7.5m, 8m) ● 班別対抗リレー(ハードルくぐりのリレー, トラックを用いたリレー)
7 8 9	<ul style="list-style-type: none"> ● 3～6時間の内容を2人組や班でできるだけ自主的にやらせる。 ● ハードリングのフォームの自己・相互評価 ● 疾走でのハードリング ● 仲間との交流(上手な者に指導させる) ● 班内のミーティング
10	<ul style="list-style-type: none"> ● 評価 相互評価・自己評価 ● リレーのタイム測定 ● 情意要因を聞く

(6) 時 案 11月18日 3限 小山台高校1年男子44名

10時間の6時間目

	学 習 内 容	指導上の留意点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ● 準備運動 ● 出欠点呼, 本時の説明 ● 班別, 補強運動 ● ハードルくぐりのリレー (往路はハードルを越え, 復路はハードルをくぐる) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 2人組や班内で相互に教え合うこと ● 下手なことは、は } を強調 ずかしいことでは ないこと。 ● 班長を中心に自主的にやらせる。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ● 抜き足の練習 (班別練習) - 歩きハードル・抜き足だけのハードル走・疾走 各班でハードルを4台並べ, インターバルを7.5mとする。 ● 3歩走ハードリング —— インターバルを7m, 7.5m, (2人組練習) 8mの3種類設定し, 自分達の走りやすいコースを選ばせ練習させる。 ● 班別対抗リレー (1000mハードルリレー) 1チーム10名, 1人100m (ハードル4台)の障害走  <p>(ハードルの高さはすべて76cm)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 班内の上手な者が, 下手な者に教えるようにする。 ● 自分の練習だけでなく, 他者のフォームを見させてアドバイスをさせる。 ● 2人組のよい人間関係ができるように配慮する。 ● 順位やタイムにこだわりすぎないよう配慮する。 ● リレーの練習の際, 2人組のうち上手な者を外側, 下手な者を内側に走らせる ● 班内の仲間意識を強くさせる。 ● 特に, 足の遅い者や下手な者が劣等意識をもたないよう配慮する。
整 理	<ul style="list-style-type: none"> ● 整理運動 ● 本時の反省, 次時の予告 ● 解 散 	<ul style="list-style-type: none"> ● 班別練習やリレーの感想を聞く。 ● 反省は2人組や班内で自主的にやらせる。

6. 事後調査にあらわれた授業の効果

実証授業前の調査結果と事後の調査結果を下の表2～表5にまとめた。(数値はすべて%である)

〈表2〉 全体の比較

		1年男子			
		前	後		
①	(1)	A ₁	70.1	69.5	
		A ₂	29.8	30.5	
	(2)	B ₁	14.1	12.4	
		B ₂	8.6	3.4	
		B ₃	26.6	31.1	
		B ₄	6.2	9.0	
		計	55.8	65.9	
		C ₁	6.5	2.8	
		C ₂	4.0	2.8	
		C ₃	22.9	28.2	
		C ₄	9.9	10.2	
		計	43.2	44.1	
	②	Aア	(1)	28.7	24.3
			(2)	30.8	20.3
(3)			31.6	21.5	
(4)			38.9	27.1	
Aイ		(1)	29.8	27.1	
		(2)	10.8	10.2	
		(3)	18.8	17.5	
Aウ		(1)	41.8	33.3	
		(2)	39.1	25.4	
Aエ		(1)	24.1	22.0	
		(2)	18.3	14.7	
		(3)	9.0	6.8	
Aオ		(1)	31.7	22.6	
		(2)	38.8	32.2	
		(3)	50.1	64.4	

〈表3〉 好き・嫌いと挫接体験

		1年男子			
		A ₁ (好き)		A ₂ (嫌い)	
		前	後	前	後
Aア	(1)	30.4	29.3	14.8	13.0
	(2)	23.6	15.4	51.7	31.5
	(3)	26.9	19.5	46.0	25.9
	(4)	46.5	33.3	19.5	13.0
Aイ	(1)	28.3	27.6	38.6	25.9
	(2)	7.8	11.4	14.7	7.4
	(3)	17.7	18.7	25.9	14.8
Aウ	(1)	39.2	30.1	51.3	40.7
	(2)	35.8	22.8	47.1	31.5
Aエ	(1)	20.8	22.0	31.7	22.2
	(2)	16.0	14.6	24.9	14.8
	(3)	6.8	6.5	15.3	7.4
Aオ	(1)	37.3	24.4	23.8	18.5
	(2)	47.6	35.0	32.6	25.9
	(3)	57.5	74.0	38.6	42.6

〈表4〉 全体の比較

〈表5〉 好き・嫌いと挫折体験

		2年女子			
		前	後		
①	(1)	A ₁	59.0	56.5	
		A ₂	40.1	43.5	
	(2)	B ₁	7.5	0	
		B ₂	3.1	3.5	
		B ₃	34.4	36.5	
		B ₄	9.4	9.4	
		計	55.8	49.4	
		C ₁	1.8	2.4	
	C ₂	2.0	2.4		
	C ₃	26.3	24.7		
	C ₄	17.4	21.2		
	計	40.9	50.6		
	②	Aア	(1)	22.4	20.0
			(2)	37.5	40.0
(3)			42.0	36.5	
(4)			36.2	28.2	
Aイ		(1)	30.9	24.7	
		(2)	14.5	22.4	
		(3)	28.5	42.4	
Aウ		(1)	54.2	56.5	
		(2)	46.9	41.2	
Aエ		(1)	10.7	7.1	
		(2)	8.0	9.4	
		(3)	12.7	11.7	
Aオ		(1)	26.9	43.5	
		(2)	35.0	49.4	
		(3)	41.5	60.0	

		2年女子			
		A ₁ (好き)		A ₂ (嫌い)	
		前	後	前	後
Aア	(1)	29.4	25.0	10.2	13.5
	(2)	31.5	18.8	58.3	67.6
	(3)	39.6	22.9	49.0	54.1
	(4)	48.3	41.7	12.1	10.8
Aイ	(1)	28.1	32.9	39.8	27.0
	(2)	13.9	16.7	18.0	29.7
	(3)	31.8	33.3	26.7	54.1
Aウ	(1)	50.9	37.5	67.5	81.1
	(2)	45.1	25.0	58.3	62.2
Aエ	(1)	5.8	0	15.0	16.2
	(2)	5.2	8.3	11.2	10.8
	(3)	8.9	4.2	20.0	21.6
Aオ	(1)	30.7	54.2	22.8	29.7
	(2)	42.0	62.5	29.6	32.4
	(3)	49.3	72.9	23.8	43.2

前記の指導計画に基づいて、実証授業を行った結果、

- (1) 「体育は面倒で疲れるから嫌い」と回答した生徒の割合は、実証授業前と事後とではほとんど変化がみられなかった。これは10時間程度の授業だけでは、生徒の体育学習に対する心情を変えることは無理であり、このような授業を長期に継続していく中で、心情の変化が期待できると思われる。
- (2) 授業の中で挫折体験をもつと回答した生徒は、実証授業前より事後の方が減っている。特に男子

にこの傾向が著しい。これは、実証授業の効果があらわれたと考えられる。女子については、授業の中での挑戦性について顕著な効果がみられたが、これは生徒の意欲を引き出してやったことによるものと考えられる。

7. む す び

- 「体育は面倒で疲れるが好き」な生徒は男子70%，女子62%である。
- 体育の好きな生徒は技能のできばえ要因より情意的要因によるのが多く、その割合は男女共に56%である。
- 体育の好きな生徒は授業中の運動量や時間の不足によって活動要求が阻害されたり、恐怖体験や劣等体験・人間関係の葛藤も少ない。また、体力や記録向上への取り組みが積極的である。体育への感情は「楽しさ」が強く、運動種目の興味・関心は「見るより行う」のが強い。
- 体育の嫌いな生徒は授業中の運動量が過剰であり、内容が高度なために活動要求が阻害され、恐怖体験や劣等体験・人間関係の葛藤も多い。また、体力や記録向上への取り組みが消極的である。体育への感情は「苦しさ」「つらさ」が強く、運動種目の興味・関心は「行うより見る」のが強い。

以上のことから、体育の嫌いな生徒を一人でも多く好きにさせるためには、前記の点を理解して指導しなければならない。特に「嫌いで下手」「下手で嫌い」な生徒の割合は、男子16.1%，女子23.2%である。体育授業での望ましい態度・習慣の育成は、この2割前後の生徒の問題点を把握し、それを排除する指導から出発すべきである。

対策として

- (1) 恐怖感や劣等感等を排除するように指導内容の工夫改善を図る。
- (2) 体力や技能等は個人差に応じた指導を実施し、運動の活動要求の充足を図る。
- (3) 体力や体格を加味した目標を設定して評価し、生徒が意欲的に取り組める学習指導の改善が必要である。

都立秋留台高校	教頭	佐野和夫	都立南高校	教諭	関毅彦
都立小山台高校	教諭	◎阿部修二	都立蒲田高校	〃	野口和矩
都立小山台高校	〃	○石川恵一郎	都立稲城高校	〃	松田智男
都立両国高校	〃	小田島正門	都立白鷺高校	〃	山本恵彦
都立南高校	〃	小泉周雄			

Ⅱ 質疑応答

(質問) 沖縄県那覇商業高 亀川 爵 先生

1. 自主性、積極性を目的としているが、質問項目はどこに該当するか。
2. 10時間の授業の学習形態との関係はないか。
3. 教師の熱意など教師への質問は行ったか。

(答え)

1～3.についての研究は昭和49～50年にすでに行っている。今回は体育嫌いの生徒を問題とした。

(質問) 福島県 小岩 先生

意識調査と授業を行ったものの集団に差があるのはなぜか。

(答え)

授業を行ったクラスに重ならない部分がでたためである。

(質問) 静岡県教委 永田 實治 先生

調査後各学校でどのような変化があったか。

(答え)

研究ということで戸惑いがあったが、ハードル走を続けていけば嫌いなものも好きになってくれると考えている。

シンポジウム

「望ましい態度・習慣の育成をめざす 学校体育の効果的指導について」

講師団の意見特集

1. 松原要子 講師（東京都立教育研究所 指導主事）

今時の教育課程の改正は、小学校から高等学校まで一貫したものとし、“人間性豊かな児童・生徒の育成”をめざし、保健体育科の目標も表現は異なるが、運動に親しませる習慣の育成、明るく健康な生活を営む態度の育成ということをめざしている。

かつての教科教育は、体力向上と技能の習得にかたむいたことを反省したのだろうが、このことを否定した訳ではないと思う。指導を受ける児童・生徒の側にたち、子供の人間形成にどう影響するかということが重大なことである。

“運動の好きな子供を育てること。そしてそれは幼児期が大切である。”ということ提案したい。過日NHKの青年の主張全国コンクールにおいて、広陵高校の野球部のエース渡辺君が発表し、大変感じることがあった。それは、試合に負けたことにより、彼が工夫して創り出したピッキングフォームを審判から注意をうけ、大きなショックを受けた。しかし、彼は将来名もない高校で野球部の監督として、多くの子供たちに野球の楽しさを教えたいということである。

彼が挫折感から立ち直り、野球に将来をかける原動力となっているものは何か。“本当に好きだから”だろうと思う。この体験は、大なり小なり経験があるだろう。この単純な言葉を幼児期に体験・育成し、その快感情こそが、その子供の生涯を通しての望ましい態度育成の原動力となるのではないかと思う。そして、好きという感情的表現は、人からいわれて行われるものではなく、自主的・自発的行動でありここに自主的態度がみられると思う。幼児教育を担当し、幼児の行動を観察していると、子供の行動は一般的に持続性が少ないけれど、好きなことには、持続と反復性があり、その中で確実に進歩・発達が認められる。本質的に遊びが嫌いな子供はいないものである。環境条件のために、遊びを知らない子供はいても、遊びの嫌いな子供はいないと思う。幼児期とは、人間生活に必要な活動を獲得する時であり運動欲求のもっとも強い時である。そして、運動欲求を満たす体験を通して、知的体験や知的発育もうながされるのである。

彼らは遊びの中で、不快なことも、仲間意識も、技能の必要性と向上心もはぐくまれ、ルールをおぼえ、社会性も培われるのである。

教師とは、このような発育・発達のためにどのように環境を整備すればよいのか、運動が好きになる豊かな感情体験を育てるためにはどうあるべきかを考えることが大切である。

それは、① 子供と楽しく遊べること。 ② そのために、子供の欲求はどんなものがあるかということの内面的にくみとれること。 ③ そして、今その子供は何ができるか。子供の身体発育、技能の獲得の状況を知ること。 ④ 子供の遊びをより多く知ること。遊びの発展法を身につけること。

⑤ 常に子供と一緒に共感できる姿勢を持つこと。この5点が大切である。

幼児教育担当の人が少ないけれど、小・中・高校の先生方も、道に迷った時は原点にもどれといわれる通り、幼児教育や身体障害児の教育は、教育のある種の原点といえると思う。運動の好きな子供の育成という提案を受けとめてほしい。

2. 三浦 勇 講師（東京女子体育大講師）

小学校教育の経験をベースにまとめてみると、体力・技能・態度は学習内容の三本柱であり、教育課程を何度改正しても変わらない。態度の育成とはこのように重要な内容である。しかし、実際の指導では、とかく体力・技能に指導が集中し、態度についてどれだけ関心をおいたかと考えると反省点が多い。指導時案を書くと、目標・評価の欄には、確かに態度に関して記載するが、指導の過程・学習の過程の中には態度に関する内容がないことが多い。

態度の指導とは、教師が意識することからはじまるのではないか。これを指導する効果的条件は、

- ① その運動特性の中から、その運動によって養われる態度、その運動を学習するのに必要な態度。
- ② 6か年という長い発達過程の中で、その接点をどこに求めるか。その接点にある態度が学習指導の中味とならなくてはならない。

小学校の中学年以降にあって、その発育の中で克服的スポーツといわれるスポーツの特性から生まれ態度の育成。つまり、根気強く運動を学ぶ態度や根気強く練習する態度を焦点にしてまとめてみたい。

現代の小学生・中学生には、この「根気がない」ということが問題とされている。態度の育成については各教科のねらいとなっているが、根気強く学習する態度の育成は体育の中の克服的スポーツの技能の学習にしか取りあげられていないのである。

根気強さ、根気よく続けるということは、やる気がなくてはならない。根気強さとは、意欲がなければ生まれぬから、やる気をおこすということであろう。そのためには、

- ① めあて・課題をしっかりと持たせること。
- ② 学習活動に自主性・自覚性がなくてはならないこと。
- ③ ほめること。認めること。
- ④ 診断的評価を行い、学習効果を常に前進向上させるよう、進路の修正をしながら指導する。
- ⑤ 学習する雰囲気づくりをすること。
- ⑥ 体力づくりをしっかりとやること。
- ⑦ 教師の根気がなくてはならないこと。

が必要である。指導者の反復性・前進性の2つの原則のもとに、子供の基礎体力がなければ継続することは不可能となりかねない。体力をベースにし、環境づくり、クラスの雰囲気の中で、安定した情緒を持ち積極的に持続させるために、目標・めあてを明確にし、自主的な自覚をもって学習できるよう、一人ひとりの学習効果を観察・評価をして、その効果や努力を認め、ほめること。より効果的な方法が考えられる時、前進向上が予測される時は、修正し指導をすることが、やる気を高め、根気強さを育成することになる。ガムシャラに続けさせるのではなく、合理性をもった活動を、教師は根気よく指導することが、望ましい態度を育成することになる。

3. 長谷川 威 講師（東京都江東区立第七中学校長）

望ましい態度・習慣の育成とは、体育を楽しく、喜んでできるようにすることが先決だと考える。このことは“楽しい喜び”ということではない。

発達段階に従い計画的・系統的な指導を、技能・体力面で実践してきたので、施設・環境は整備され体位の向上はめざましいものがある。しかし、心位（心）の点ではどうだろうか。態度・習慣の育成を忘れた訳ではなかったが、指導展開は、ただ一方的な進め方だったのではないかと考えられる。一方的な教え方では、習慣化は望めないし、われわれ人間は考えながら行動する能力を持っているとしたら、一方的な養い方ではいけないことになるだろう。

わたしは、バスケットボールの集団スポーツの指導を通してまとめてみる。管理職のために、十分な指導時間は取れないが、顧問・監督として、私のパターンができあがり、無意識のうちに試合に勝つという至上主義に立って、わたしのいう通りに部員が団結し動いてくれると、よい生徒（選手）と思っているのではないかと反省している。

生徒が考えた練習に関するアイデアや発想をとりあげ、話し合い、考えさせる練習を実施したら、もっとよいクラブができるのではないか。

そこで、教科指導におけるバスケット単元（15時間配当）で、第6時限と第9時限の授業を分析してみたことがある。サゼッション（子供に与える提案）・インストラクション（教授）・ディレクション（指示・監督）の3点を調べ、さらに子供の意識・感想を調査した。やらせる授業・何も考えない授業と、話し合い・考える授業の対比で2時間の中に違いが現われてくる。

技術を中心とした一方的な学習ではいけない。教師の予定する学習のねらいを、生徒に具体化させるすなわち課題を与える（サゼッション）ことが、楽しい授業・やりがいのある授業・喜びのある授業となる。そして、このことは、思いきり運動ができたという充実感や、肉体的活動を通して心の満足感が得られなくてはならないのである。

技術の向上も1つの満足感となろう。しかし、さらに、クラスやグループの中で、互いに話し合い、助け合い、自主的・創造的な集団活動を進めることが必要であり、このことにより技術のレベルはさらに高くなるし、高いレベルとはこのことをさすのではないか。

学校教育目標に照らし合わせ、どんな人間の育成をめざすか。そのためにはどのような教育をすすめるか。また、そのためにはどのような授業を展開するか、全教科が一体となり考えなくてはならない。その中で体育の責任は大きいということを自覚すべきであると考える。

4. 太田哲男 講師（順天堂大学体育学部教授）

態度に関する測定を行ったことがある。実際の教科指導の場では、このデータは役立たないだろうが、集団面接による測定・調査である。

運動種目に対してどんな好みを持っているか。また、運動に対してどんな価値づけをしているか。種目を通してどこに自分として一貫した態度の傾向を示しているかという調査であった。

その中の一女子高校生が、中学時代にクラスメイトの前で跳び箱の見本試技を命ぜられて以来、体育が大嫌いになったと申し立てた事例があった。この生徒たちの発言は、今、体育に欠けているものは何か、ということを提言しているように思われる。それは、教師と生徒が一体となり、同志的な結びつき

が欠けているのではないかということである。このことは、選手とコーチの関係でもいえる。試合直前急にスランプになる選手は結構多い。その中で、選手とコーチの人間関係が原因であることがしばしば見うけられる。

教育における取り組み方は、先生方に微妙な点の違いがあるように、体育に対する考え方も当然違いが考えられる。歴史的にみても、肉体のトレーニング時代から頭部を含めたフィジカルなトレーニングとなり、physical Education という教育の点にウェイトを持ってきている。このことは、ますます教師側として教える内容や目標が豊かになる訳である。そして、このことは当然、教材も体育の時代からスポーツゲームの時代となり、さらにはプレイの時代という段階があらわれる訳である。

指導者はそこで、体験的な個人的教師の中に科学性が入り、特に学習心理学の理論を適用する点からテストや測定が現われたことにより、指導内容は技能ということが中心となってきた。指導法も効果的指導法が問われ、このような段階を経て、今日では知的な面も入り、運動を通して、社会的なふれあいや望ましい人格的な行動を求めるなど、認知的な働きも入り、これらの方法を模索することとならざるを得ない。

体育指導は、教育の中では複雑な分野であり、種々の影響を受けやすい。体育とは、言葉のコミュニケーションという言葉に対して『言葉を使わないコミュニケーション』といえる。このことは、現代の大脳生理学から考えると、非常に複雑なプロセスを通らねばならないことである。

運動の知性化をはかり、態度という価値づけや、大脳生理の右半球の調和的発達が望まれている。現代の体育は、単に体力だけ、知性化だけ、頭の働きだけ、社会性だけ、あるいは情動・情緒だけの目標であってはならないのである。これらが同等に経験できる運動の与え方を考えなければいけないのである。

現代の子供たちは、本当に運動の経験がとぼしい。調査のレベルに達していない子供の多いことを知らされたのである。社会がゆれ動き、体育の重要性がさげられる中で、われわれ指導者は何をすべきか。あるいは、現在何が欠けているのかということ、この態度・習慣の問題を通して考えなくてはならないと考える。

5. 高島 博 講師（ロゴセラピー学会日本代表）

職業柄、医学的立場でまとめてみたい。4人講師の方は、好きになること、目標と場が必要である。集団スポーツの効果、体育学習の生理学・心理学そして哲学的価値を述べられた。内容は違っても、先生方は教師と児童・生徒の人間関係について強調されたと思う。

人間関係。心の問題が大切である。人間の行動は欲求・欲望があるからおこるのである。児童・生徒が満足する手順や欲求の価値・意味を手ほどくことが大切である。欲求の発達段階を見ると、①生存欲求→②運動欲求→③快楽欲求→④権力欲求→⑤意味欲求の5つの欲求が、①乳幼児期→②学童少年期→③・④青年期→⑤壮年期以降と展開される。

意味とは哲学であり、体育の中で大切なことであると思う。意味を理解した時、価値が理解され、心が働き、そして人間関係も理解されるのだと思う。

身体（行動＝運動）によって、どんなことをするか、ということも重要なことである。運動によって得られることは、身体の流動性・弾力性・反発性・創造性そして進歩性という5項目、身体条件がみ

がかれ、このことがさらに心＝精神の中にも残るのである。

「体力増強・健康増進」, 「健全な精神は健全な肉体に宿る」という言葉がある。この諺をもう一度考えてみたい。

「健全な精神よ健全な肉体に宿れかし」というラテン語が、いつか「健全な精神は健全な肉体に宿る」と変わってしまったが、肉体と精神はこのようなものではない。ヘレン・ケラー女史はどうか。健全な肉体の持ち主がはたして健全な精神の持ち主ばかりであるか。

「体力増進＝健康増進」と考え違いをしていないか。若い子供たちには、体力増進が健康増進に通じることが多いが、老人や、人によっては一直線上に必ずあるとはいえない。わたしが関係する病人、患者の中に、身障者であるからこそ根性のある人、責任感の強い人を数多く知っている。肢体不自由者、落ちこぼれ者ということをもう一度考えてみたい。

2～3例をあげると、腕のきかない18歳の女性が、足で料理を作り、毛糸をあみ、彼女はこんな詩を詠んでいる。『目の前に厚い壁がある。それでも行こう普通の人いる村へ。しょうがないという重荷を背おって。』 本当にかくましい女性である。ある中学生男子が相談にきた。「僕は落ちこぼれなんだ。」「健全な精神は健全な肉体に宿る」というラテン語の誤り話を語って勇気づけた。

体力増進は健康増進あるいは精神強化につながることは多いと思う。運動によって忍耐力が養われ、ルールということにより規律を守り、責任感、耐える精神などが育成される。しかし、禅のように「静」の型の中にも精神修養が可能であり、身障者の事例などを考えてほしい。心の持ち方・意味の取り方で変化することを認識しなくてはならない。前方の目標・意味・価値によっては、つらいこと・苦しいことも、楽しいことに変わり得るということ。

将棋の木村名人を称して「努力の人」と世間ではいう。しかし、本人は「私は好きなことをやっていただけで、努力をしたおぼえはない。」という言葉は大変意味深い。また、先日引退した貴の花関は「つらいことだけだった。」と答えた。しかし、時がたち、部屋を持って、後輩指導に専念する時、このつらかった体験は、必ず楽しい思い出と変わり、「楽しかった。」の言葉に変わると思う。

近年の子供は骨折率が高い。食・住生活の変化や体力のなさというより、倒れることをおそれ、転び方がへたになったのではないか。失敗をおそれ、根性がなくなり、ひ弱になっていると思う。

世間で「試行錯誤」とよくいう。わたしはこれを『錯誤修正』という言葉で補足して、「試行錯誤」を全うすべきだと思ふ。

編集を終えて

— 今後のとり組みのために —

本号は、前号（第13巻）に続いて、第19回全国学校体育研究大会分科会の「研究発表」（含 質疑応答）の中から小学校2篇、中・高校各1篇計4篇を選んで掲載いたしました。掲載に当っては、できるだけ最近掲載された都道府県からのものは除くようにいたしました。

本号の内容は、本年度の研究発表の課題が「学校における体育活動の効果的な指導 — 特に望ましい態度・習慣の育成をめざして — 」ということであったので、小・中・高校ともに授業のねらいに、望ましい態度・習慣の育成におかれていました。



いうまでもなく体育の授業は、身体運動（文化）を媒介にして、次代の日本を背負う青少年を育成していくことにあるわけですから、教師は20～30年後のわが国の状況を先取りして、その時点での日本は国際社会の中で一体どんな位置にあり、そこで日本人はどんな役割を果たさねばならないか、そして、このような役割を果たすにはどんな資質をもった国民を養成しなければならないかを予見して、その期待に応える青少年を育成していかねばなりません（私は、これから必要とされる国民の資質は、既存の知識を学習する態度に加えて新しい価値を創り出していく創造性、義務感と責任感に富んだ個人としての主体性、自由と平等を実現する利他的・社会的愛、これらの精神を国際社会へと拡大していくことのできる国際性の4つの資質が必要のように思います）。したがって、まず教師は、自らそのような人間性を育てるべく努力しなければならないし、この努力の過程が教師稼業だともいえるでしょう。



体育の授業では、児童・生徒がどれだけできるようになったとか、また、どれくらいその運動の技術が上達したかなどにねらいがあるのではなく、そのように行いそのようになったことが、その児童・生徒にとってどんな意味を持っていたのか、つまりその運動がその児童・生徒の何とどのように関わっていたのかを見定め、それへ向かって働きかけること、つまるところ、教育は典型的に現われた事実に教師が働きかけるのではなく、その事実が意味するもの — 本質に働きかけねばならないでしょう。

一般に、事実は実在的なもの、本質は非実在的なものとみなされています。本質は非実在的なものですから感覚器官では容易に知覚されず、そのため科学的資料として提出することが不可能なものです。

このように教育は、学習者の非実在的な本質に働きかける営みだけに、児童・生徒の内面的なもの — 意欲や主体性、内面的な体験など — を探索（私は、児童・生徒の意欲や内面的な体験を呼び起こさせるには、考える状況を設定し、そして待つことが必要だと思います。具体的には、児童・生徒が自分で運動を行う方法を考えさせ、行う場を豊かに設定する。そして、学習者の本質的なものに向かって励ましの言葉を与え、他方では学習者一人ひとりが学び合うと同時に、その中に秩序づけもする。しかも授業は全体として運動量があり、雰囲気としてそこには楽しさがあるような授業場面を設定）をしながら、学習者にどんな手だてをしたのか、その結果、彼等はどのようになったのかといった継続的な問い

かけの積みかさねこそが大切だと思いますし、授業研究の資料もまたその発表もこのようなものが貴重だと思います。

◇ ◇ ◇

このように考えると、児童・生徒が行っている身体運動そのものが、それぞれ彼等の本質的なものと関わって初めて、その運動材は体育教材となり得たといえるし、その授業は効果があったといえるでしょう。

この意味で、学習者が身体運動そのもの＝本質という関係がなりたてば、本年度の研究課題として取りあげられた授業は、まさに「喜びと意欲をもって」「生き生きと取り組める」「効果的なよい習慣・態度の育成をめざした」それぞれの体育授業であったということになるでしょう。

そして、習慣・態度の形成には、全教師あげての全校的な取り組みが望まれるし、正課体育だけではなしに、課外スポーツもさらには家庭・地域スポーツをも包摂した取り組みも必要になるでしょう。また、これらの諸活動が日常化するばするほど、その習慣・態度の育成もし易くなります。

◇ ◇ ◇

望むならば、このようなことがらが予め先生方に周知徹底されていれば、授業研究はもとより、その成果としての当日の研究発表の内容の討議にも反映し、質疑応答も少しは活性化したのではないかと思います。

以上、今後の研究大会の分科会のことも考慮して敢えて蛇足を加えさせて頂いた次第です。

最後になりましたが、甲南女子大学の鯨坂二夫先生のご講演「学校体育に期待するもの」の内容を掲載させて頂きました。日頃の体育指導の糧にして頂ければ幸いです。

なお、編集員一同、本号の内容はもとより、次号の内容・記事の盛り方などについても読者諸兄姉から忌憚のないご意見・ご批判の戴けることを期待しています。

終りに臨み、本号は特に都立武蔵野北高校・高尾 障先生のお骨折りをいただきましたことを心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

編集委員会

(文責：浅田隆夫)

財団法人日本学校体育研究連合会編集委員会

発行日 昭和56年6月30日

発行所 大石三四郎

発行所 財団法人日本学校体育研究連合会

〒151 東京都渋谷区代々木神園町3番1号

国立オリンピック記念

青少年総合センター内

☎ 03-465-3954・7464

印刷 栄和印刷株式会社

世田谷区深沢5-3-9

☎ 704-5377

非売品

